大捕物仙人壺

国枝史郎

1

女軽業の大一座が、高島の城下へ小屋掛けをした。
慶応末年の夏の初であった。
別荘の門をフラリと出ると、伊太郎（いたろう）は其方（そっち）へ足を向けた。
「いらはいいらはい！　始まり始まり！」と、木戸番の爺（おやじ）が招いていた。
「面白そうだな。入って見よう」
それで伊太郎は木戸を潜った。
今、舞台では一人の娘が、派手やかな友禅の振袖姿

で、一本の綱を渡っていた。手に日傘をかざしていた。
「浮雲(あぶな)い浮雲い」と冷々しながら、伊太郎は娘を見守った。
「綺麗な太夫(たゆう)じゃありませんか」
「それに莫迦に上品ですね」
「あれはね、座頭の娘なんですよ。ええと紫錦(しきん)とか云いましたっけ」
これは見物の噂であった。
小屋を出ると伊太郎は、自分の家へ帰って来た。いつも物憂そうな彼ではあったがこの日は別(わ)けても物憂そうであった。

翌日復も家を出ると、女軽業の小屋を潜った。そうして紫錦の綱渡りとなると彼は夢中で見守った。
こういうことが五日続くと、楽屋の方でも目を付けた。
「オイ、紫錦さん、お芽出度う」源太夫は皮肉に冷かした。「エへ、お前魅られたぜ」
「へン、有難い仕合せさ」紫錦の方でも負けてはいない。「だがチョイと好男子だね」
「求型という所さ」
「一体どこの人だろう？」
「お前そいつを知らねえのか。——伊丹屋の若旦那だ

よ」
「え、伊丹屋？　じゃ日本橋の？」
「ああそうだよ、酒問屋（さかどんや）の」
「だって源ちゃん変じゃないか、ここはお前江戸じゃないよ」
「信州諏訪でございます」
「それだのにお前伊丹屋の……」
「ハイ、別荘がございます」
「おやおやお前さん、よく知ってるね」
「ちょっと心配になったから、実はそれとなく探ったやつさ」

「おや相変らずの甚助(じんすけ)かえ」紫錦はすっぱに笑ったが「苦労性だね、お前さんは」

「何を云いやがるんでえ、篦棒(べらぼう)め、誰のための苦労だと思う」

「アラアラお前さん怒ったの」

面白そうに笑い出した。

「おい紫錦、気を付けろよ、いつも道化じゃいねえからな」

「紋切型さね、珍らしくもない」

紫錦はすっかり嘗めていた。

ところでその晩のことであるが、桔梗屋(ききょうや)という土地

の茶屋から、紫錦へお座敷がかかって来た。

「きっとあの人に相違（ちがい）ないよ」こう思いながら行って見ると、果して座敷に伊太郎がいた。

さすがに大家の若旦那だけに、万事鷹様（おうよう）に出来ていた。

酒を飲んで、世間話をして――いやらしいことなどは一言も云わず、初夜前に別れたのである。

ホロ酔い機嫌で茶屋を出ると、ぱったり源太夫と邂逅（でっくわ）した。待ち伏せをしていたらしい。

「源ちゃんじゃないか、どうしたのさ」

「うん」と彼イライラしそうに「彼奴（あいつ）だったろう？

え、客は？」
「言葉が悪いね、気をお付けよ。彼奴だろうは酷かろう」紫錦は爪楊枝を噛みしめた。
「いつお前お姫様になったえ」源太夫も皮肉に出た。
「たった今さ。悪いかえ」
「小屋者からお姫様か」
「そういきたいね、心掛けだけは」
小屋の方へ二人は歩いて行った。
源太夫というのは通名で、彼の実名は熊五郎であった。親方には実の甥で、紫錦とは従兄弟にあたっていた。

その翌晩のことであるが、また同じ桔梗屋から紫錦にお座敷がかかって来た。
「行っちゃ不可ねえ、断っちめえ」
熊五郎は止めにかかった。
「いい加減におしよ、芸人じゃないか」
紫錦は衣裳を着換えると、念入りにお化粧をし、熊五郎に構わず出かけて行った。
気を悪くしたのは熊五郎であった。
「へん、どうするか見やアがれ」
恐ろしい見幕で怒鳴り声をあげた。

2

同じ一座の道化役、巾着頭のトン公は、夜中にフイと眼を覚ました。

ヒューヒュー、ヒューヒュー、ヒューヒューと、口笛の音が聞こえてきた。

「はアてね、こいつアおかしいぞ」

首を擡げて聞き澄ましたが、にわかにムックリ起き上った。周囲を見ると女太夫共が、昼の劇しい労働に疲労、姿態構わぬ有様で、大鼾で睡っていた。

それを跨ぐとトン公は、楽屋梯子を下へ下りた。

暗い舞台の隅の方から、黄色い灯の光がボウと射し、そこから口笛が聞こえてきた。

誰か片手に蠟燭を持ち、檻の前に立っていた。と、檻の戸が開いて、細長い黄色い生物が、颯と外へ飛び出して来た。

「おお可し可し、おお可し可し、ネロちゃんかや、ネロちゃんかや、おお可い子だ、おお可い子だ……」

口笛が止むとあやなす声が、こう密々と聞こえてきた。フッと蠟燭の火が消えた。しばらく森然と静かであった。と、暗い舞台の上へ蒼白い月光が流れ込んで来た。誰か表戸をあけたらしい。果して、一人の若者

が、月光の中へ現われた。肩に何か停(と)まっている。長い太い尾をピンと立てた、非常に気味の悪い獣(けもの)であった。

　月光が消え人影が消え、誰か戸外(そと)へ出て行った。

「思召(おぼしめ)しは有難う存じますが……妾(わたし)のような小屋者が……貴郎(あなた)のような御大家様の……」

「構いませんよ。構うもんですか……貴女(あなた)さえ厭でなかったら……」

「なんの貴郎、勿体ない……」

　紫錦(しきん)と伊太郎(いたろう)は歩いて行った。

帰るというのを、送りましょうと云うので、連れ立って茶屋を出たのであった。左は湖水、右は榠樝(かりん)畑、その上に月が懸かっていた。諏訪因幡守三万石の城は、石垣高く湖水へ突き出し、その南手に聳えていた。城下(まち)の燈火(ともしび)は見えていたが、そのどよめきは聞えなかった。

穂麦(ほむぎ)の芳(かんば)しい匂がした。蒼白い光を明滅させて、螢が行手を横切って飛んだが、月があんまり明るいので、その螢火は映(は)えなかった。

「美しい晩、私は幸福(しあわせ)だ」

「妾も楽しうござんすわ」

畦道（あぜみち）は随分狭かった。肩と肩とを食（く）っ付けなければ並んで歩くことが出来なかった。

いつともなしに寄り添っていた。

やがて湖水の入江へ出た。

「あら、舟がありますのね」

「私の所の舟なんですよ」

「ね、乗りましょうよ。妾漕げてよ」紫錦はせがむように云うのであった。「貴郎のお宅までお送りするわ」

それで二人は舟へ乗った。

湖上には微風が渡っていた。櫂（かい）で砕（くだ）かれた波の穂が、鉛色に閃（ひら）めいた。水禽（みずどり）が眼ざめて騒ぎ出した。

二人は嬉しく幸福であった。

「さあ来てよ、貴郎のお家（うち）へ」

そこで、二人は舟を出て、石の階段を登って行った。

木戸を開けると裏庭で、柘榴（ざくろ）の花が咲いていた。

「寄っておいで、構やしないよ」

「いいえ不可（いけ）ませんわ、そんなこと」

二人は優しく争った。

やっぱり女は帰ることにした。一人で櫓櫂（ろかい）を繰（あやつ）って紫錦は湖水を引き返した。

どこか、裏庭の辺りから、口笛の音の聞こえてきた

のは、それから間もないことであった。

「今時分誰だろう？」

楽しい空想に耽りながら、いつもの寝間の離座敷で、伊太郎は一人臥（ふせ）っていた。

ヒューヒュー、ヒューヒューとなお聞こえる。

と、コトンと音がした。庭に向いた窓らしい。「はてな？」と思って眼を遣ると、障子へ一筋縞が出来た。細目に開けられた戸の隙から月光が蒼く射したのであろう。

「あ、不可（いけ）ない、泥棒かな」

すると光の縞の中へ、変な形があらわれた。

長い胴体、押し立てた尻尾、短い脚が動いている。
と思った隙（ひま）もなくポックリと障子へ穴があいた。颯（さっ）と部屋の中へ飛び込んで来た。
「鼬（いたち）だ」
と伊太郎は刎起（はねお）きた。「誰か来てくれ、鼬だ鼬だ！」
ぼんやり点（とも）っている行燈（あんどん）の光で、背を波のように蜒（うね）らせながら伊太郎目掛けて飛び掛かって行く巨大な鼬の姿が見えた。
母屋の方から人声がして、母を真先に女中や下男が、この離（はなれ）へやって来た時も、なお鼬は駆け廻っていた。
母のお琴（こと）はそれと見ると、棒のように立ち縮んだ。

「鼬！」と顫え声で先ず云った。「口笛の音？　ああ幽霊！」

それからバッタリ仆(たお)れてしまった。

お琴は気絶したのである。

鼬の姿はいつか消え、遠くで吹くらしい口笛の音が、なお幽(かすか)に聞こえていた。

3

「私(わっち)は現在見たんでさあ。嘘も偽わりもあるものですかい。ええええ尾行(つけ)て行きましたとも。するとどう

でしょうあの騒動でさ」

楽屋へは朝陽が射し込んでいた。人々はみんな出払っていて、四辺(あたり)はひっそりと静かであった。女太夫の楽屋のことで、開荷(あけに)、衣桁(いこう)、刺繍した衣裳など、紅紫繚乱(こうしりょうらん)美しく、色々の物が取り散らされてあった。

「でも本当とは思われないよ。そんな事をする人かしら？」

「恋は人間を狂人(きちがい)にしまさあ」

「だって妾(わたし)あの人に対して何もこれまで一度だって……それに妾達は従兄妹同志じゃないか」

「従兄妹であろうとハトコであろうと、これには差別

はござんせんからね。……私（わっち）はこの眼で見たんでさあ」

「だってそれが本当なら、あの人それこそ人殺しじゃないか」

「だからご注意するんでさあね」

「ただの鼬（いたち）じゃないんだからね」

「喰い付かれたらそれっきりでさあ」

「恐ろしい毒を持っているんだからね」

「私（わっち）は現在見たんでさあ。裸蠟燭を片手に持って、ヒューッ、ヒューッと口笛を吹いて、檻からえて物を呼び出すのをね。そいつを肩へひょいと載っけて、月

夜の往来へ出て行ったものです。こいつおかしいと思ったので、直ぐに後をつけやした。それ私は四尺足らず、三尺八寸という小柄でげしょう。もっとも頭は巾着で、平く云やア福助でさあ。だから日中歩こうものなら、町の餓鬼どもが集って来て、ワイワイ囃して五月蝿うござんすがね。折柄夜中で人気はなし、家の陰から陰を縫って、尾行て行くには持って来いでさあ。小さいだけに見付かりっこはねえ。で行ったものでございますよ。別荘作りの立派な家、そこまで行くと立ち止まり、ジロリ四辺を見まわしたね、それから木戸を窃と開けて、入り込んだものでございますよ。

で、しばらく待っていると、そこへお前さんとあの人とが、湖水(うみ)から上って来たものです。そこで鼬を放したというものだ」
「でもマア大騒ぎをしただけで、怪我はなかったということだから、妾は安心をしているのさ」
「ところが、あの人の母者人なるものが、気を失ったということですぜ」
「まあ、よっぽど驚いたんだね」
「おどろき、梨の木、山椒の木だ。が、ままともかくもこの事件は、これで納まったというものだ。そこでこれからどうしなさる？」

「どうするってどうなのだよ？」

「一度こっきりじゃ済みませんぜ」

「じゃまたあるとでも云うのかい？　源ちゃん、そんなに執念深いかしら？」

「お前さんの遣り方一つでさあ」

「だって妾、これまでだって、随分お座敷へは呼ばれたじゃないか」

「それとこれとは異(ちが)いまさあ。それはそれで金取り主義、ご祝儀頂戴の呼吸(いき)だったが、今度はどうやらお前さんの方でも、あの青二才に惚れているようだ」

「何を云うんだよ、トン公め！」

今から数えて十六年前、酒商［＃ルビの「さけしょう」は底本では「さけしやう」］伊丹屋伊右衛門は、この城下に住んでいた。

旧家ではあり資産家ではあり、立派な生活を営んでいた。お染という一人娘があった。その時数え年漸く二歳で、まだ誕生にもならなかったが、ひどく可愛い児柄であった。夫婦の寵愛というものは眼へ入っても痛くない程で、あまり二人が子煩悩なので、近所の人が笑うほどであった。

ところがここにもう一人、藤九郎という中年者が、

ひどくお染を可愛がった。甲州生れの遊人で――本職は大工ではあったけれど、賭博は打つ酒は飲む、いわゆる金箔つきの悪であったが、妙にお染を可愛がった。

　もっともそれには理由（わけ）があるので、お染の産れたその同じ日に――詳細（くわし）く云えば弘化（こうか）元年八月十日のことであるが、藤九郎の女房のお半（はん）というのが、やはり女の児を産んだ。ところがそれが運悪く産れた次の日にコロリと死んだ。それを悲しんで女房のお半も、すぐ引き続いて死んでしまった。さすが悪の藤九郎も、これには酷（ひど）く落胆して、一時素行も修まった程であった。

　ところでこのころ藤九郎は、伊丹屋の借家に棲んで

いたので、よく伊丹屋へは出入りした。自然お染と顔を合わせる。子を失った親の愛が、同じ日に産れた家主の子へ、注がれるというのは当然であろう。

4

しかるにここに困ったことが出来た。
月日が経つに従って、お染の顔が父親へは似ずに、藤九郎の顔に似るのであった。
「藤九郎め、好男子（いいおとこ）だからな」
「そういえば、伊丹屋のお神（かみ）さんは、莫迦に藤九郎め

を贔屓にしたっけ」
「誰の種だか解(わか)りゃしねえ」
世間の人達はこう云い合った。
しかし真面目な伊丹屋の内儀が、博奕風情の藤九郎などを問題にするはずがない。それは伊右衛門(いえもん)も信じていた。で幸いこの事については何の事件も起こらなかった。
しかし事件はその翌年、すなわちお染の二歳の時に、別の方面から起こってきた。
それは実に嘉永(かえい)元年夏の初めのことであったが、母のお琴(こと)はお染を抱きながら、裏庭の縁で涼んでいた。

すると最初口笛が聞こえ、次に鼬(いたち)が現われた。アッと驚く隙(ひま)もなく鼬はお染へ噛みついた。幸い手当が速かったので、腕へ歯形が印(つ)いただけで、生命(いのち)には何の別状もなかった。ところが何と奇怪なことには、その翌晩にも口笛が聞こえ、同じ鼬が現われたではないか。そうして鼬はお染を追って、庭の植込の方へ行ったかと思うと、お染の姿が消えてしまった。

　ちょうどこの頃城下外(はず)れに女軽業の大一座が小屋掛けをして景気(けいき)を呼んでいた。女太夫の美しいのも勿論評判ではあったけれど、四尺に余る大鼬が、口笛に連れて躍るというのがとりわけ人気を博していた。

それで、自然疑いがその一座へかかって行った。官からも役人が出張し、厳重に小屋を吟味した。しかしお染はいなかった。誘拐したという証拠もない。どうすることも出来なかった。

伊丹屋夫婦の悲嘆にも増して、藤九郎の悲嘆は大きかった。

「彼奴は有名な悪党なんですよ。ええ、あの一座の親方って奴はね。ちょっと私とも知己なんで。釜無の文というんでさ。……ああ本当に飛んだことをした。みんな私が悪かったんで、つい迂闊り口を走らしたんでね」

彼はこう云って口惜（くや）しがった。
その後伊丹屋では親類から、伊太郎という養子を迎え、間もなく江戸へ移り住んだが、お染のことは今日が日まで忘れたことはないのであった。
「……こういう事情があるのだもの、妾（わたし）が鼬を恐がったり、女軽業を憎むのは、ちっとも無理ではないじゃないかえ」
母のお琴は辛そうに云った。
「だからさ、お前もその意（つもり）で、そんな小屋者の紫錦（しきん）なんて女を、近付けないようにしておくれよ。どうぞどうぞお願いですからね」

「だってお母さん不可ませんよ」伊太郎はやっぱり反対した。「私は紫錦が好きなんですもの。それにその女は見た所、悪い女じゃありませんよ」
「きっと悪い女ですよ」
「第一その時の女軽業と、今度の軽業の一座とは、別物に相違ありませんよ」
「鼬を使うとお云いじゃないか」
「それだって別の鼬ですよ」
「いいえ同じ鼬です。妾見たから知っています」
お琴は飽く迄も云うのであった。

紫錦はこれ迄は源太夫を別に嫌ってはいなかった。しかし今度の遣り口で、すっかり愛想を尽かしてしまった。

「甚助め！　飛んでもねえ奴だ！」

そこで、自然の反動として、伊太郎へ好意を持つようになった。

その伊太郎は、本来は、小心で憂鬱の質であった。朋輩交際で芸者などは買ったが、深入りなどはしたことがない。それだのに今度の紫錦ばかりは、そういう事にいかなかった。つまりぞっこん惚れ込んだのであった。

こういう男女の落ち行く先は、古来往来（ここんおうらい）同一（ひとつ）である。夫婦になれなければ心中である。

驚いたのはお琴であった。

彼女は窃（こっそ）り訴え出た。「娘を誘拐（かどわか）した同じ一座が、今度は息子を誑（たぶら）かそうとします。どうぞお取締まり下さいますように」と。

勿論官では取り上げなかった。しかし全然別の理由から、立退きを命ずることにした。

この一座が掛かって以来、にわかに盗難が多くなって、風紀上面白くない。だから追い払おうと云うのであった。

鼬の芸当が人気を呼んでこの一座は評判が可（よ）かった。で生温い干渉では、引き払って行きそうには思われなかった。それに時代が幕末で、諸方には戦争が行なわれていた、官の威光も薄らいでいた。下手をすると逆捻（さかねじ）を喰らう。

で疾風迅雷的に、やっつけようと云うことになった。

その夜二人はいつものように、肩を並べて茶屋を出た。

湖上は凄いほど静かであった。空を仰げばどんよりと曇り、今にも降ってきそうであった。

伊太郎を家(うち)へ送り込むと、紫錦は舟を漕ぎ返した。と、その時雨と一緒に嵐が颯(さつ)と吹いてきた。周囲四里の小湖ではあったが、浪が立てば随分危険で、時々漁舟(いさりぶね)を覆えした。

「これは困った」と驚きながら、紫錦は懸命に櫓を漕いだ。

次第に嵐は吹き募り、それに連れて浪が高まり、間もなく櫓櫂(ろかい)が役に立たなくなった。

「どうしよう」

と紫錦は周章(あわ)てながらなおしばらくは櫓を漕いだ。

しかし益々風雨は募り、全くシケの光景となり、漕

いでも無駄と知った時、紫錦は舟底へ身を横仆(よこた)えた。

「どうともなれ。勝手にしやアがれ」

そこは小屋者の猛烈性で、こんな事を思いながら、案外暢気(のんき)に寝そべっていた。

「ご大家様のお坊ちゃん、今こそ妾(わたし)に夢中になって、夫婦になろうの駆落しようのと、血道をあげているけれど、その中(うち)きっと厭になるよ。そうしたら捨てるに違いない。捨てられたら元々通り小屋者の身分へ帰らなけりゃならない。いつ迄も小屋者でいるくらいなら、死んだ方が増しじゃないか」

雨と泡沫(しぶき)で彼女の体は、漬けたように濡れてしまっ

た。

「おや」

と彼女は顔を上げた。空が俄かに赤くなったからで、見れば遙か町の一点が、焔を上げて燃えていた。

「おやおやこんな晩に火事を出したんだよ。何て間抜けな人足だろう。アラ、驚いた、小屋じゃないか！」

正(まさ)しく火事を出したのは、女軽業の掛小屋であった。役人達が遣って来て、立退きを命ずると、急に彼等は周章(あわ)て出した。そうして役人に反抗し、突然小屋へ火を掛けた。これには役人達も驚いたが、しかし事情

はすぐ解（わか）った。この時代の小屋者の常で、彼等は反面、賊でもあった。で盗み蓄めた品物が、小屋に隠されてあったのである。

つまり贓物（ぞうぶつ）［＃「贓物」は底本では「臓物」］を焼き払い、証拠を湮滅させようため、わざと小屋へ火を掛けたのであった。

それと感付くと役人達は、がぜん態度を一変させ、彼等を捕縛（とら）えようと犇（ひし）めいた。

彼等は男女取り雑（ま）ぜて三十人余りの人数であった。それに馬が二頭いた。それから白という猛犬がいた。それから例の鼬がいた。これらのものが一斉に、役人

達に敵対した。彼等は武器を持っていた。商売用の刀や匕首（あいくち）や、竹槍などを持っていた。
どんなに彼等が凶暴でも、三十人こっきりであったなら、捕縛えるに苦労はしなかったろう。しかるにここに困ったことには味方する者が現われた。
当時諏訪藩は佐幕党として、勤王派に睨まれていた。で安政（あんせい）年間には有名な水戸の天狗党が、諏訪の地を蹂躪した。又文久年間には、高倉（たかくら）三位と宣（なの）る公卿が、贋勅使として入り込んで来た。勝海舟の門人たる相良惣蔵（さがらそうぞう）が浪士を率（ひき）い、下諏訪の地に陣取って乱暴したのもこの頃であった。

それで、この事件の起こった時でも、勤王派の浪士達が、様々の者に姿を窶（やつ）し、城下の諸方に入り込んでいたが、これが小屋者の味方となって、役人方に斬り込んだ。

それに城下の町人達の中にも、味方する者が出来てきて、石礫を投げ出した。

事態重大と見て取って、城下からは兵が出た。

内乱と云えばそうも云え、市街戦と云えばそうも云える。思いも由（よ）らない大事件が、計らず勃発したのであった。

城兵かそれとも浪士達か、鉄砲を打ち出したものが

あった。
と、火事が飛火した。女の悲鳴、子供の泣声、避難する人々の喚き声が、山に湖面に反響した。
この時一人の若者が、逃げ惑う人々を押し退けて、小屋の方へ走って行った。
他でもない伊太郎で、恋人の安否を気遣って、家を抜け出して来たのであった。
小屋は大半焼け落ちていて、焔の柱、煙の渦巻……その中で戦いが行なわれていた。
役人の一人を殺し、血だらけの竹槍を振りかざしな

がら、荒れ廻っていた小屋掛があったが、伊太郎の姿に眼を付けると、

「野郎！」

と叫んで飛び掛かって行った。余人ならぬ源太夫であった。

「紫錦さんは‼　紫錦さんは‼」

「何を吠(ほざ)く！　死(くたば)ってしまえ！」

源太夫は伊太郎の襟上を掴むと、ズルズルと火の中へ引き込もうとした。

と、焔に狂気しながら、馬が一頭走り出して来た。

「嬲殺しだ！　思い知れ！」

伊太郎は馬の背へ括り付けられた。

「ヤッ」と叫ぶと源太夫は竹槍で馬の尻を突いた。

馬は驀地（まっしぐら）に狂奔し、湖水の中へ飛び込んだ。

ワッワッと云う鬨声（ときのこえ）。火事は四方へ飛火した。

5

湖水は猛烈に荒れていた。火事は益々燃え拡がった。物凄くもあれば美しくもあった。

紫錦は小舟に取り付いたまま浪の荒れるに委せていた。火事の光が水に映り四辺（あたり）が茫（ぼっ）と明るかった。

その時何物か浪を分けて彼女の方へ来るものがあった。
「おや、馬だよ。馬が泳いで来る」
いかにもそれは馬であった。
「おや。黒（あお）だよ、黒来い来い！」
紫錦（しきん）は喜んで声を上げた。
馬は馴染の黒であった。つまり彼女が芸当をする時、時々乗った馬であった。近付くままによく見ると誰やら馬の背にくくり付けられていた。それが恋人の伊太郎であると火事の光りで見て取った時の彼女の驚きと云うものはちょっと形容に苦しむ程であった。その伊

太郎は気絶していた。そうして手足から血を流していた。

彼女は軽業の太夫（たゆう）であって馬扱いには慣れていた。で小舟を乗り捨てて馬と一緒に泳ぐことにした。荒れ狂う浪を掻き分け掻き分け馬と人とは泳ぎに泳いだ。精も根も尽き果て、もう溺れるより仕方がないと、こう彼女が思った時、眼前に石垣が現われた。伊太郎の家の石垣であった。

伊太郎の家ではもう先刻（さっき）から、伊太郎の姿が見えないと云うので、母をはじめ家内の者は狂人のようになっていた。とそこへ現われたのが伊太郎を抱き抱え

た紫錦の姿であった。
「伊太郎さんが！」
「若旦那が！」
と、にわかに人々は活気付いた。張り詰めていた精神がこの時一時に弛んだと見えて、紫錦は気絶してグダグダと倒れた。それと云うので人々は二人を家の中へ舁ぎ入れた。間もなく医者が駈け付けて来て応急手当を施した。

この頃町では火事と戦いとがなお烈しく行なわれていた。それが全然（すっかり）静まったのは夜も明け方に近い頃で、その結果はどうかと云うに、むしろ諏訪藩の負けで

あった。小屋者にも浪士達にも、大半逃げられてしまったのであった。

伊太郎と紫錦が蘇生したのはそれから間もなくのことであった。二人は顔を見合わせてかつ驚きかつ喜んだ。紫錦は伊太郎の命の親であった。伊丹屋としても粗末に出来ない。それに彼女が属していた例の軽業の一行は、今は行衛（ゆくえ）不明であった。いわば彼女は宿なしであった。で伊丹屋では娘分として彼女を養うことにした。

信濃の春は遅かったが秋の立つのは早かった。湖水の水が澄みかえり八ヶ嶽の裾野に女郎花（おみなえし）が咲いた。虫

の鳴音が降るように聞こえた。この頃伊丹屋では諏訪を引き上げ江戸の本宅へ帰ることになった。

さて、ところで、紫錦にとっては、江戸の本宅の生活は、かなり窮屈なものであった。ジプシイ型の彼女から見れば、まるで不自由そのものであった。ちょっと外出(でる)にも女中が付き、箸の上げ下げにも作法があった。

「簡単」ということが卑しまれ「面倒臭い」ということが尊ばれた。膝を崩すことも出来なければ寝そべることも出来なかった。あらゆるものに敬語を付け、呼び捨てにするのを失礼とした。「お箸(はし)」「お香の物」「お

櫛（ぐし）」「お召物」——
　彼女は繁雑に耐えられなくなった。
　それに一緒に住んで見れば、柔弱の伊太郎も鼻に付いた。
「万事万端拵（こしら）え物のようで、活気というものがありゃアしない」彼女はこんなように思うのであった。
「お金持とか上流とか、そういった人達の生活（くらし）方が、みんながみんなこうだとすれば、ちっともうらやましいものではない」
　とはいえ以前の生活へ帰って行きたいとは思わなかった。それは「泥棒の生活」であり又「動物の生活」

だからであった。

「何か妾にぴったりと合った有意味の暮らし方はないものかしら」

彼女はそれを目付けるようになった。

伊丹屋の主人伊右衛門が或日女房にこう云った「お錦(きん)、近来(ちかごろ)変わってきたね。なんだかおちつかなくなったじゃないか」

「そう云えば本当にそうですね」女房のお琴(こと)も眉を顰(しか)め「いったいどうしたって云うんでしょう」

「それにお錦は左の腕を、いつも繃帯しているが、どうも私は気になってならない」

「ほんとにあれは変ですね」

「お前からそれとなく訊いて見るがいい」

――それで、或日それとなくお琴はお錦へ訊(たず)ねて見た。

「お前傷でもしたんじゃないの？」

「いいえ、そうじゃございません」お錦はそっと着物の上から左の二の腕を抑えたが、

「痣があるのでございますの」

「まあ、そうかえ、痣がねえ」

お琴は意外な顔をした。

紫錦(しきん)は伊丹屋へ来て以来、その名をお錦(きん)と呼び変えられていた。そのお錦の最近の希望(のぞみ)は、女中も連れず、ただ一人で浅草辺りを歩いて見たいことで、もしそれが旨く行こうものならどんなにのうのうするだろう——こう彼女は思うのであった。

で或日外出した時、うまうま途中で女中をまいた。喜んだお錦はその足で浅草の方へ歩いて行った。浅草奥山の賑(にぎわい)は今も昔も変りがなく、見世物小屋からは景気のよい囃子の音が聞こえてきた。恐ろしいような

人出であった。
観音様へお賽銭を上げ、それからお堂の裏手の方へ宛もなく彼女は歩いて行った。
「オイ紫錦さん、紫錦さんじゃないか！」
誰やら背後から呼ぶ者があるので彼女は驚いて振り返った。
「おや、お前、トン公じゃないか？」
「ナーンだ、やっぱり紫錦さんか」
昔のお仲間、道化のトン公、三尺足らずの福助頭――それが笑いながら立っていた。
「たしかにそうだとは思ったが、何しろ様子が変って

いるだろう。穏し作りのお嬢さん、迂闊り呼び掛けて人異いだったら、こいつ面目がねえからな。それでここまでつけて来たのさ」

「まあそうかえ、どこで目付けたの？」

「うん、玉乗の楽屋でね。俺らあそこに傭われているんだ」

二人は歩きながら話すことにした。

「……で、そういった塩梅でね、諏訪以来一座は解散さ。チリチリバラバラになったのさ。……随分お前を探したよ。親方にとっては金箱だし源公から見れば恋女だ。そのお前がどこへ行ったものか、かいくれ行衛

が知れねえんだからな。そりゃア随分探したものさ。ああ今だって探しているよ。執念深い奴らだからな」
「そりゃあもう探すのが当然さ」
お錦は何となく憂鬱に云った。「それで、随分怒っているだろうね」
「ああ随分怒っているよ。恩知らずの不幸者だってね。……そう親方が云うんだよ」
「実の親でもない癖に」お錦はにわかに反抗的に「不幸者が聞いて呆れるよ」
「そうともそうとも本当にそうだ」トン公はすぐに同情した。「怨こそあれ恩はねえ道理だ。いずれお前を

誘拐（かどわか）したものさ」
「そうよ、妾の小さい時にね」
「その上ふんだんに稼がせてよ。あぶく銭を儲けたんだからな」
「恩もなけりゃ義理もない訳さ」
「ところでどうだな、今の生活（くらし）は？」
「さあね」とお錦は気がなさそうに「大してうらやましい生活でもないよ」
「そうかなア、不思議だなア」トン公は仔細らしく考え込んで「でもお前（めえ）伊丹屋といえば江戸で指折の酒屋じゃねえか。そこの養女ときたひにゃア云う目が出る

というものだ」
「そりゃあそうだよ。云う目は出るさ。でもね、本当の幸福ってものは、そんなものじゃないと思うよ」
「それにお前（めえ）伊太郎さんは、お前の好きな人じゃアねえか」
「嫌いでなかったという迄の人さ。それにどうも妾とはね、気心がピッタリと合わないのだよ」
「ふうん、そうかなア、変なものだなア。……だが、オイ、そりゃア我儘ってもんだぜ」
しかしお錦は黙っていた。
「だがマアお前（めえ）と逢うことが出来て、俺（おい）らほんとに嬉

しいよ」ややあってこうトン公が云った。
「お前はそうでもあるめえがな」
「いいえ妾だって嬉しいよ」本心からお錦は云うのであった。「何といったたって昔馴染だからね」
「そう云われると嘘にしても俺らは素敵にいい気持だよ」
なるたけ人のいない方へと二人は歩いて行くのであった。
「それじゃお前さんはここ当分玉乗の一座にいるんだね」
「他に行き場もないからな」

「それじゃいつでも逢えるのね」
「だが余(あんま)り逢わねえがいい、今じゃ身分が異(ちが)うんだからな」
「莫迦をお云いな。逢いに行くわよ」
「それに親方も源公もいずれ江戸の地にはいるんだからな、あんまり暢気(のんき)に出歩いていて目付けられると五月蠅(うるさい)ぜ。何しろ源公ときたひにゃア、未だにお前に夢中なんだからな」
「源公なんかにゃ驚かないよ」お錦はむしろ冷笑した。
「それこそ一睨みで縮ませて見せるよ」
「そりゃあマアそうに異(ちげ)えねえが……」

トン公はやはり心配そうであった。

7

二三日経った或日のこと、浅草観音の堂の側(わき)に、目新しい芸人が現われた。莚を敷いたその上で大きな鼬を躍らせるのであったが、それがいかにも上手なので、参詣の人の注意をひいた。

芸人の年輩は不明であったが、四十歳から六十歳迄の間で、左の耳の根元の辺りに瘤のあるのが特色であった、陽にやけた皮膚筋張った手足、一癖あり気の

鋭い眼つき、気味の悪い男であった。

「さあさあ太夫（たゆう）さん踊ったり踊ったり」

手に持っていた竹の鞭で、窃（そっ）と鼬に障わりながら、錆のある美音で唄い出した。

〽甲州出るときア涙が出たが

今じゃ甲州の風も厭

春陽が明々と地を照らしその地上では鳩の群が餌をあさりながら啼いていた。吉野桜が散ってきた。堂の横手芸人の背後（うしろ）に巨大な公孫樹（いちょうのき）が立っていたが、まだ新芽は出ていなかった。鼬の大きさは四尺もあろうか、それが後足で立ち上り、前足をブラブラ宙に泳がせ、

その茶色の体の毛を春陽(はるひ)にキラキラ輝かせながら、唄声に連れて踊る態は、可愛くもあれば物凄くもあった。投銭放銭がひとしきり降り、やがて芸当が一段落となった。その時目立って美しい娘が供の女中を一人連れ仲見世の方からやって来たが、大道芸人の顔を見るとにわかに足を急がせた。その様子が変だったので、大道芸人は眼をそばめた。

「おや？　可笑(おか)しいぞ、彼奴(あいつ)そっくりだぞ？」

こう口の中で呟いたかと思うと、彼の側(そば)に蹲居(しゃが)んでいた二十四五の若者へ、顎でしゃくって合図をした。

「オイ源公(げんこう)、今のを見たか？」

「うん」と云うと若者は、その殺気立った燃えるような眼で、人混の中へ消え去ろうとする娘の姿を見送ったが、「異(ちげ)いねえよ、あの阿魔(あま)だよ」

「だが様子が変わり過ぎるな」

「ナーニ彼奴だ、彼奴に相違ねえ」

「そうさ、俺もそう思う」

「畜生、顔を反けやがった」

「オイ源公、後をつけて見な」

「云うにゃ及ぶだ。見遁せるものか」

で、源公は人波を分け、娘の後を追って行った。

「さあさあ太夫(たゆう)さん一踊り、ご苦労ながら一踊り……

〽男達（おとこだて）ならこの釜無（かまなし）の流れ来る水止めて見ろ……ヨイサッサ、ヨイサッサ」

大道芸人が唄い出し、鼬が立っておどりだした。

「おおトン公（こう）か、よく来てくれた」

「爺（とっ）つぁん」は嬉しそうにこう云うと、夜具の襟から顔を出した。「爺つぁん」は酷く窶（やつ）れていた。ほとんど死にかかっているのであった。

ここは金龍山瓦町（きんりうざんかわらまち）［#ルビの「きんりうざんかわらまち」はママ］の「爺つぁん」の住居（すまい）の寝間であった。

「どうだね「爺つぁん」？　少しはいいかね？」

トン公は坐って覗き込んだ。

「有難えことには、可くねえよ」——「爺つあん」はこんな変なことを云った。

「おかしいじゃないか、え「爺つあん」？　可くもねえのに有難えなんて？」

すると「爺つあん」は寂しく笑い、

「うんにゃ、そうでねえ、そうでねえよ。俺らのような悪党が、磔刑にもならず、獄門にもならず、畳の上で死ねるかと思うと、こんな有難えことはねえ」

「へえ、なるほど、そんなものかねえ」トン公はどうやら感心したらしい。「だがね、「爺つあん」俺らには

ね、お前が悪党とは思われないんだよ」
「ナーニ俺は大悪党だよ」
「でも「爺つぁん」は貧乏人だと見ると、よく恵んでやるじゃないか」
「ああ恵むとも、時々はな。つまりナンダ罪ほろぼしのためさ」
「でも一座の連中で、お前のことを悪く云う者は、それこそ一人だってありゃアしねえよ」
「それは俺らが座主だからだろう」
「ああそれもあるけれどね……」
「うっかり俺の悪口でも云って、そいつを俺に聞かれ

たが最後、首を切られると思うからさ」
「ああそいつもあるけれどね……」
「それより他に何があるものか」
「金を貸すからいい親方だと、こうみんな云っているよ」
「アッハハハ、そうだろう。その辺りがオチというものだ。ところでそういう人間のことだ、俺が金を貸さなくなったら、今度は悪口を云うだろうよ」
「ああそりゃあ云うだろうよ」トン公は直ぐに妥協した。それが「爺つあん」には可笑しかったか面白そうに笑ったが、

「トン公、お前は正直者だな。だから俺はお前が好きだ」
「ううん、何だか解(わか)るものか」それでもトン公は嬉しそうに笑った。
「うんにゃ、俺はお前が好きだ。その剽軽な巾着頭(きんちゃくあたま)、そいつを見ていると好い気持になる」
「何だ俺らを嬲るのけえ」トン公は厭な顔をした。
「怒っちゃいけねえいけねえ。本当のことだ、なんの嬲るものか。それはそうと、なあトン公、お前は随分苦労したらしいな」

「ああ随分苦労したよ」トン公はちょっと寂しそうにした。

「俺らの一座へ来る前には、お前(めえ)どこの座にいたな？」

「俺ら軽業の一座にいたよ」

「軽業の一座？　ふうん、誰のな？」

「「釜無(かまなし)の文(ぶん)」の一座にだよ」

　これを聞くと「爺つあん」は急にその眼を輝かせたが、すぐ気が付いてさり気なく、

「ああそうか「釜無の文」か……ところで諏訪ではご

難だったそうだな」
「お話にも何にもなりゃあしない」
「それはそうと文の一座に綺麗な娘がいたはずだが？」
「幾人もいたよ、綺麗な娘なら」
「それ、文の養女だとか云う？」
「ああそれじゃ紫錦（しきん）さんだ」
「うん、そうそうその紫錦よ、行衛（ゆくえ）が知れないって云うじゃないか」
するとトン公は得意そうにニヤリとばかり一人笑いをしたが「ああ行衛が知れないよ。……だが俺らだけ

は知っている」

「え？」と、「爺つぁん」は眼を丸くした。「お前知っているって？　紫錦の行衛を？」

こう云う「爺つぁん」の声の中には恐ろしい情熱が籠っていた。それがトン公を吃驚（びっくり）させた。

「おいトン公」と「爺つぁん」は、夜具から体を抜け出させたが「ほんとにお前が知っているなら、どうぞ俺に話してくれ。お願いだ、話してくれ。え、紫錦はどこにいるんだ？」

「だが紫錦さんの在所（ありか）を聞いて「爺つぁん」お前はどうする意（つもり）だな」

「どうしてもいい、教えてくれ！　え、紫錦はどこにいるな？」

「お気の毒だが教えられねえ」にべもなくトン公は突っ刎ねた。

「教えられねえ？　何故教えられねえ？」

「お前の本心が解(わか)らねえからよ」

「俺の本心だって？　え、本心だって？」

「今紫錦さんは幸福なんだよ。ああそうだよ大変にね。もっとも自分じゃ不幸だなんて我儘なことを云ってるけれど、ナーニやっぱり幸福(しあわせ)なのさ。だがね、紫錦さんの幸福はね、どうも酷(ひど)く破壊(こわれ)やすいんだよ。で、

ちょっとでも邪魔をしたら、直ぐヘナに破壊っちまうのさ。ところでどうも運の悪いことには、その紫錦さんの幸福をぶち破壊そうと掛かっている、良くねえ奴がいるのだよ。だがここに幸(しあわせ)のことには、まだそいつらは紫錦さんの居場所を、ちょっと知っていねえのさ。……ね、これで解ったろう、俺らがどうして紫錦さんの居場所を、お前に明かさねえのかって云うことがな」

「だが」と「爺つあん」は遮った。「だが俺はお前の云う、よくねえ奴じゃねえんだからな。だから明かしたっていいじゃねえか」

「どうしてそれが解るものか」
「じゃお前はこの俺を悪党だと思っているのだな？」
「俺らはそうは思わねえけれど、お前が自分で云ったじゃねえか」
「だが、そいつは昔のことだ」
「ああそうか、昔のことか」
「今では俺はいい人間だ。いつも俺は懺悔しているのだ」
「そうだと思った。そうなくちゃならねえ。だが「爺つあん」それにしてもだ、紫錦さんの居場所を俺らから聞いて一体どうするつもりだな？」

すると「爺つぁん」は声を窃め、四辺をしばらく見廻してから「人に云っちゃいけねえぜ。え、トン公承知だろうな。……実は俺はその紫錦に大事な物を譲りてえのだ」

「だがお前と紫錦さんとはどんな関係があるんだろう？」

「それは云えねえ。云う必要もねえ」いくらか「爺つぁん」はムッとしたらしい。

「とにかく」と「爺つぁん」は云いつづけた。「それを譲られると譲られた時から、紫錦は幸福になれるんだよ」

「……」トン公は黙って考え込んだ。どうやら疑っているらしい。しかしとうとうこう云った。
「俺ら、お前を信じることにしよう。紫錦さんの居場所を明かすことにしよう」
「おおそれでは明かしてくれるか。有難え有難えお礼を云う。で、紫錦はどこにいるな？」
「江戸にいるよ。この江戸にな」
「江戸はどこだ？　え、江戸は？」
「日本橋だよ。酒屋にいるんだ」
「日本橋の酒屋だって？」
「伊丹屋という大金持の養女になっているんだよ」

「ふうん、伊丹屋の？　ふうん、伊丹屋のな？……あぁ、夢にも知らなかった」

葉村一座と呼ばれる所の浅草奥山の玉乗の元締、それをしている「爺つぁん」は、どうしたものかこう云うと涙をポロポロ零したが、そのまま夜具へ顔を埋めた。

驚いたのはトン公であった。ポカンと「爺つぁん」を眺めやった。

チョンチョンチョンと拍子木の音がどこからともなく聞こえてきた。

「おや、どうしたんだろう？　あの拍子木の音は？」

お錦は呟いて耳を澄ました。

「トン公の拍子木に相違ないよ」

そこで彼女は部屋を抜け出し裏庭の方へ行って見た。木戸の向うに人影が見えた。下駄を突っかけると飛石伝いに窃(そっ)と其方(そっち)へ小走って行った。燈火(ともしび)の射さない暗い露路に小供が一人立っていたが、しかしそれは小供ではなく思った通りトン公であった。

「トン公じゃないか、どうしたのさ？」

するとトン公は近寄って来、
「よく拍子木が解（わか）ったな」
「お前の打手を忘れるものかよ」
「実は急に逢いたくってな、それで呼び出しをしたやつさ」
「用でもあるの？　お話しおしよ」
「ねえ紫錦（しきん）さん、俺らと一緒に、ちょっとそこ迄行ってくれないか」四辺（あたり）を憚ってトン公は云った。
「行ってもいいがね、どこへ行くの？」
「金龍山瓦町（きんりうざんかわらまち）［#ルビの「きんりうざんかわらまち」はママ］へよ」

「浅草じゃないか、随分遠いね、それにこんなに晩になって」お錦は怪訝そうに云うのであった。
「それがね、至急を要するんだ」
「へえ不思議だね、何の用さ」
「逢いてえって人があるんだよ。是非お前(めえ)に逢い度えって人がな。それが気の毒な病人なんだ」
「誰だろう？　知ってる人？」
「お前の方じゃ知らねえだろうよ。だが確かな人間だ。実は俺らの親方なのさ」
「お前の親方？　玉乗りのかい？」
「ああそうだよ。葉村(はむら)一座のな。俺らその人に頼まれ

て、お前を迎いに来たってやつよ」
トン公はそこで気が付いたように、
「だがお前は出られめえな、なにせ大家のお嬢さんだし、もう夜も遅いんだからな」
「行くならこのまま行っちまうのさ」
「だが後でやかましいだろう？」
「そりゃあ何か云われるだろうさ」
「困ったな、では止めるか。止めにした方がよさそうだな」
「くずくず云ったら飛び出してやるから、そっちの方は平気だよ。それより妾（わたし）にゃその人の方が気味悪く

思われるがね」
「うん、こっちは大丈夫だ。俺らが付いているんだからな」
「では行こうよ。思い切って行こう」
そこで二人は露地を出て、浅草の方へ足を運んだ。
「トン公」とお錦は不意に云った。「今日彼奴（あいつ）らと邂逅（でっくわ）したよ。源公（げんこう）の奴と親方にね」
「え！」とトン公は怯えたように声を上げたが「ふうんそいつあ悪かったなあ。一体どこで邂逅したんだい？」
「観音様の横手でね」

「それじゃ今日の帰路（かえり）にだな」
「お前と別れてブラブラ来るとね、莚（むしろ）の上で親方がさ、えて物を踊らせていたじゃないか」
「ふうんそいつアしまったなあ」
「早速源公が後をつけて来たよ」
「え、そいつアなおいけねえや」
「ナーニ途中で巻いっちゃった［＃「巻いっちゃった」はママ］よ」
「そいつアよかった。大出来だった」
　話しながら歩いて行った。
　こうして上野の山下へ来た。と五六人の人影が家の

陰から現われ出た。

「おや」とトン公が云った時、堅い棒で脳天の辺りを厭という程ブン撲られた。「あっ、遣られた、こん畜生め！」こう叫んだがその声は咽喉から外へ出なかった。たちまちにグラグラと眼が廻り、何も彼も意識の外へ逃げた。

お錦は人影に取り巻かれた。

「何をするんだよお前達は！」

気丈な彼女は怒鳴（どな）り付けたが、何の役にも立たなかった。彼女は直ぐに捉えられた。

「構う事アねえ、担いで行け！」

彼等の一人がこう云った。彼女にはその声に聞き覚えがあった。

「あ、畜生、源公だな！」

「やい、紫錦、態(ざま)あ見ろ！　よくも仲間を裏切ったな、料(りょう)ってやるから観念しろ！」

源太夫は嘲笑った。

「さあ遣ってくれ、邪魔のねえうちに」

しかし少々遅かった。邪魔が早くも入ったのである。

「これ、待て待て、悪い奴等(やつら)だ！」

こう云って走って来る人影があった。

「あっ、いけねえ、侍だ」

「またにしろ！　逃げたり逃げたり！」
——源太夫の群はお錦を投げ出しどことも知れず逃げてしまった。

10

「娘御、お怪我はなかったかな」
「あぶないところをお助け下され、まことに有難う存じます。ハイ幸い、どこも怪我は……」
「おおさようか、それはよかった。……や、ここに仆(たお)れているのは？」

こう云いながら若侍はトン公の方へ寄って行った。
「妾の知己でございます。もしや死んだのではございますまいか？」
お錦は不安に耐えないように、トン公の上へ身をかがめた。
若侍は脈を見たが、「大丈夫でござる。活きております。どうやら気絶をしたらしい」
間もなくトン公は正気になった。
「済まねえ済まねえ、眠っちゃった。ナーニもう大丈夫だ。だが畜生頭が痛え」
負け惜しみの強いトン公は、気絶したとは云わな

かった。
二人を救った若侍は小堀義哉（こぼりよしや）というもので、五百石の旗本の次男、小さい時から芸事が好き、それで延寿（えんじゅ）の門に入り、五年経たぬ間に名取となり、今では立派な師匠株、従って父親とはソリが合わず、最近家を出て一家を構え、遊芸三昧に日を暮らしている結構な身分の者であったが今日も清元のおさらいに行き、遅くなっての帰路であった。
「またさっきの悪者どもが盛り返して来ないものでもない、瓦町（かわらまち）まで送りましょう」
義哉は親切にこう云った。

で三人は歩くことにした。

「爺つぁん」の住居へ着いたのはそれから間もなくのことであったが、別れようとする若侍をお願いして錦は引き止めて置いて、家の内へ入って行った。

ガランとした古びた家であった。

そうして「爺つぁん」の寝ている部屋は、その家の一番奥にあった。

「「爺つぁん」、紫錦（しきん）さんを連れて来たよ」

トン公はこう云って入って行った。

「トン公、どうも有難う」

こう云いながら「爺つぁん」は布団の上へ起き上っ

た。そうしてつつましく膝をついたお錦の顔をじっと見た。
と、みるみる「爺つぁん」の眼から大粒の涙が零れ出た。非常に感動したらしい。
「おかしな爺さんだよ、どうしたんだろう？」
お錦はひどく吃驚(びっくり)した。
勿論彼女には見覚えはない。初めて会った老人である。
「どうして涙なんか零すんだろう？　妾(わたし)をどう思っているのだろう？　気味の悪い爺さんだよ」
こう思わざるを得なかった。

「トン公」やがて「爺つぁん」は云って「ちょっとこの場を外してくれ。ナーニ大丈夫だ、心配しなくてもいい。ただちょっと話すだけだ」

「「爺つぁん」のことだ、ああいいとも」

トン公は云いすてて出て行った。

後を見送った「爺つぁん」は、その眼を返すとお錦の顔を、またもじっと見守ったが、

「おお紫錦、大きくなったなあ」

不意に優しくこう云った。いかにも親し気な調子であり、慈愛に充ちた調子であった。

お錦にとっては意外であった。何の理由で、何の権

利で、紫錦などと呼び捨てにするのだろう？　で彼女は不快そうに顔をそむけて黙っていた。
「それに、ほんとに、立派になったなあ」
　また「爺つぁん」はこう云った。感情に充ちた声である。
「いらざるお世話で、莫迦にしているよ」いよいよ慣れ慣れしい相手の様子に、彼女は一層腹を立て、心の中でこう怒鳴ったが、でもやっぱり黙っていた。
　しかし「爺つぁん」は態度を変えず、同じ調子で云いつづけた。「聞けばお前は日本橋の伊丹屋さんにいるそうだが、この上もない結構なことだ。辛抱して可

愛がられ、嫁になるように心掛けなければならねぇ」
ここでちょっと言葉を切ったが、「ところでお前は二の腕に、大きな痣があるだろうな？」
「ええ」と初めてお錦は云った。「大きな痣がありますわ。どうしてそんなこと知っているんでしょう？」
「私はな」と「爺つぁあん」は微笑しながら「そうだ、私はな、お前のことなら、どんなことでも知ってるよ」
確信のあるらしい調子であった。
で、お錦は怪しみながらも改めてつくづくと「爺つぁあん」を見た。しかしやはりその老人は、彼女にとっては見覚えがなかった。

「紫錦（しきん）」と「爺（とっ）つぁん」は云いつづけた。「俺の命は永かあねえ、胃の腑に腫物（できもの）が出来たんだからな。で俺はじきに死ぬ。また死んでも惜しかあねえ。俺のような悪党は、なるだけ早く死んだ方が、かえって人助けというものだ。それで死ぬのは惜しかあねえが、ここに一つ惜しいものがある。他でもねえこの箱だ」

布団の下から取り出したのは、神代杉（じんだいすぎ）の手箱であった。

「これをお前に遣ることにする。大事にしまっておくがいい。そうして俺が死んだ後で、窃（こっそ）りひらいて見るがいい。お前を幸福（しあわせ）にしようからな」

　ここでちょっと憂鬱になったが、

「そうだ、そうしてこの箱をひらくと、お前の本当の素性もわかる。もっともそいつはかえってお前を不幸（ふしあわせ）にするかもしれねえがな。……だがそれも仕方がねえ」

「爺つあん」はしばらく黙り込んだ。

　それからソロソロと手を延ばすと、指先を畳目へ差し込んだ。それからじっと聞き耳を澄まし四辺（あたり）の様子

をうかがってから、ヒョイと畳目から指を抜いた。「これを」と「爺つぁん」は囁くように云った。「早くお取りこの鍵を！」

見ると「爺つぁん」は指先に小さい鍵を摘まんでいた。

「箱も大事だが鍵も大事だ。鍵の方がいっそ大事だ。だから別々にしまって置くがいい。この鍵でなければこの箱は、どんなことをしても開かないんだからな、……ところで紫錦よ気をおつけ。敵があるからな、敵があるからな。……で、もうこれで用はおえた。気をつけてお帰り、気を付けてな」

そこでお錦は二品を貰い、急いで部屋を抜け出した。送るというのをことわって、義哉と一緒に帰ることにした。

森然とふけた夜の町を、二人は並んで歩いて行った。

義哉から見たお錦という女は、どうにも不思議な女であった。華美な身装、濃艶な縹緻、それから推すと良家の娘で、令嬢と云ってもよい程であったが、その大胆な行動や、物に臆じない振舞から見れば素人娘とは受け取れない。

「不思議だな、見当がつかない。……だが実に美しいものだ。しかしこの美には毒がある。触れた男を傷つ

ける美だ」
肩をならべて歩きながらも、警戒せざるを得なかった。
「ところで住居(すまい)はどの辺りかな？」
こらえられずに訊いてみた。
「ハイ、日本橋でございます」
「日本橋はどの辺りかな？」
「あの伊丹屋という酒問屋で」
「はあ、伊丹屋、さようでござるか」
義哉はちょっとびっくりした。伊丹屋といえば大家である。その名は彼にも聞えていた。

「失礼ながら、ご令嬢かな？」
「ハイ、娘でございます」
「さようでござるか、それはそれは」
こうは云ったが愈々（いよいよ）益々（ますます）、疑わざるを得なかった。
「それほどの大家の令嬢が、こんな深夜に江戸の町を、あんな片輪者を一人だけ連れて、浅草あたりのあんな家を、どうして訪ねたものだろう？　いやいやこれは食わせ物だ。色を売る女であろうもしれぬ」
しかし間もなくその疑いが杞憂であったことが証拠立てられた。
「あの、ここが妾（わたくし）の家で」

こう云いながら指差した家が、紛れもなく伊丹屋であったからである。
「あの……」とお錦は云い難そうにしばらくもじもじしていたが「いずれ明日改めて、お礼にお伺い致しますがどうぞその時までこの手箱をお預かり下さることなりますまいか」
こう云いながら差し出したのは「爺つぁん」から貰った手箱であった。
「ははあ」と義哉は胸の中で云った。「さては恋文でも入れてあるのだな。あの浅草の古びた家は媾曳（あいびき）の宿であったのかもしれない。大胆な娘の様子から云って

も、これは確かにありそうなことだ。とんだ所へ飛び込んだものだ」

苦笑せざるを得なかった。

彼は身分は武士ではあったがその心持は芸人であった。でこういう頼み事を、断るような野暮はしない。

「よろしゅうござる、承知しました」

こう云って手箱を受け取った。

「拙者の姓名は小堀義哉、住居は芝の三田でござる。いつでも受け取りにおいでなさるよう」

こう云い捨てて歩き出し、少し行って振り返って見ると、伊丹屋の表の潜戸(くぐりど)があき、そこから内へ入って

行く美しいお錦の姿が見えた。

12

「爺つぁん」はすっかり疲労（つかれ）てしまった。

ひどく感動をした後の、何とも云われない疲労であった。

で、布団を胸へかけ、静かに睡（ねむり）へ入ろうとした。すると襖がひっそりとあいて、雇婆（やといばあ）さんが顔を出した。

「もし、親方、お客様ですよ」

「誰だか知らねえが断っておくれ」

「どうしても逢いたいって仰有るので」
「ところが俺は逢いたくねえのだ」
「困りましたね、どうしましょう」
婆さんはいかにも困ったらしかった。
「どんな人だね、逢いたいって人は？」
それでもいくらか気になるか、こう「爺つあん」は訊いて見た。と婆さんが返事をしないうちに、
「「爺つあん」俺だよ」という声がした。
開けられた襖のむこう側に、一人の男が立っていた。
耳の付け根に瘤があった。
「おっ、お前は文じゃねえか！」

「爺つぁん」は仰天してこう叫んだ。
「うん、そうだよ、「釜無(かまな)しの文(ぶん)」だよ」こう云いながらその男は、ヌッと部屋の中へ入って来たが「婆さん」と、ひどく威嚇的に「お前あっちへ行っていな、俺ら(おいら)「爺つぁん」に用があるんだからな」
　雇婆さんが行ってしまった後、二人はしばらく黙っていた。
「オイ」と文はやがて云った。「久しぶりだな、え「爺つぁん」……いや全く久しぶりだ」
「うん」と「爺つぁん」は物憂そうに「久しぶりだよ、全くな」

「おいら夢にも知らなかった。まさかお前が江戸も江戸、浅草奥山でも人気のある、葉村（はむら）一座の仕打（しうち）として、こんな所にいようとはな。……なるほど、世間はむずかしい、これじゃ探しても目付からなかった訳だ」

「目付けてくれずともよかったに」

「お前の方はそうだろうが、俺の方はそうはいかねえ」

「ところで、どうして目付けたな？」

「うん、それが、偶然からさ。今日お前のやっている葉村の玉乗を見に入ったものさ。俺だって生きている人間だ、たまには楽しみだって必要ってものさ。ところでそこでトン公を目付けた」

「ああ成程、トン公をな」
「彼奴(きゃつ)は元々俺の座で、道化役をしていた人間だ」
「そういうことだな、トン公から聞いた」
「ところが今じゃお前の座にいる」
「ははあ、それじゃ、それについて、文句をつけに来たんだな」
「うんにゃ、違う、そうじゃねえ。……俺(おい)ら信州の高島で、とんでもねえブマを打っちゃってな、一座チリチリバラバラよ。だからトン公がどこにいようと、苦情を云ってく筋はねえ。だからそいつあ問題外だ。……とにかくトン公を目付けたので、それからそれと手

繰って行って、お前という者を探りあてたのよ」

「で、お前の本心はえ？」こう「爺つぁん」は切り出した。

「よく訊いた、さて本心だが、どうだい「爺つぁん」交換（かえっこ）しようじゃねえか」釜無しの文はヅッケリと云った。

「交換だって？　え、何の？」

「永年お前が欲しがっていた、あの紫錦を返してやろう。その代り一件の手箱をくんな」

「成程」と云ったが、「爺つぁん」は、変に皮肉に微笑した。「その交換なら止めようよ」

「え、厭だって？　どうしてだい？」文は明かにびっ、、、くりした。
「もうあの娘には用がねえからさ」
「おかしいな、どうしてだい？」
「俺の心が変ったからさ」
「だって、お前の子じゃあねえか」
「それに」と「爺つあん」は嘲笑うように「噂によるとあの紫錦は、高島以来お前の所から、行衛を眩ましたって云うじゃねえか」
「え？」と云ったが釜無しの文は、顔に狼狽を現わした。しかしすぐに声高く笑い「トン公の野郎め、喋舌っ

たな！」

「手許にもいねえその紫錦を、どうして俺らへ返してくれるな？」

「うん」と云ったが、行き詰ってしまった。

「だがな」と文は盛り返し「いかにも紫錦は手許にはいねえ。だが居場所は解っている。源公が後をつけて行ったはずだ」

「ふうむ」

と今度は「爺つあん」の方が、苦悶の色を現わした。

「だから紫錦は俺達のものさ」

「ほんとに居場所を知っているのか？」

「知っていなくてさ。大知りだ」
「どこに居るな？　云ってみるがいい」
「じゃ、よこせ、杉の手箱を！」
隙さず文は手を出した。

13

「その手箱なら手許にないよ」素気なく「爺つぁん」は云い放った。
「嘘を云いねえ、ほんとにするものか」文は憎さげに笑ったが、「ではどうでも厭なのだな。ふん、厭なら止

すがいい。その代り紫錦を連れて来て、もう今度は遠慮はいらねえ、何も彼もモミクチャにしてやるから」
これを聞くと「爺つぁん」の顔は、不安のために歪んだが、
「文！　紫錦にゃ罪はねぇ！　そんな事はよしてくれ！」
「じゃ、手箱を渡すがいい」
「ないのだないのだ！　手許には！」
「じゃ一体どこにあるのだ？」
「そいつあ云えねえ。勘弁してくれ」
「云えなけりゃそれまでよ。……そろそろ料理に取り

かかるかな」

　文は部屋から出ようとした。

「オイ待ってくれ、釜無しの！」と「爺つぁん」は周章（あわ）てて呼びとめた。

「何か用かな？　え、「爺つぁん」？」相手の苦痛を味わうかのように文はゆっくりとこう云った。

「ほんとに紫錦をいじめる気か？」

「二枚の舌は使わねえよ」

「ほんとに居場所を知ってるのか？　え、紫錦の居り場所を？」

「二枚の舌は使わねえよ」

「それじゃどうも仕方がねえ」じっと「爺つあん」は考え込んだが、
「云うとしよう、在り場所をな」
「おお云うか、それはそれは」文はニタリと北叟笑(ほくそえ)みをしたが、「どこにあるんだ、え、手箱は」
「その代り手箱を手に入れたら、きっと紫錦からは手を引くだろうな」
「云うにゃ及ぶだ、手を引くとも。元々あの娘を抑えたのは、その手箱が欲しかったからさ。いわば人質に取ったんだからな。……で、手箱はどこにあるな？」
「よく聞きねえよ、その手箱はな……」

「おっと、云っちゃいけねえ！」突然こう云う声がした。

驚く二人の眼の前へ、襖をあけて現われたのは、他でもないトン公であったが、頭を白布で巻いているのは、傷を結(いわ)えたからであろう。

「おお親方、久し振りだね」まず文へ挨拶をした。

「や、手前、トン公じゃねえか！」文は憎さげに怒鳴(どな)り声をあげ「福助の出る幕じゃあねえ、引っ込んでろ！」

「そいつはいけねえ、いけねえとも、お生憎さまだが引っ込めねえ」負けずにトン公はやり返した。

「と云うなあお前さんが、あんまり嘘を云うからさ」
「ナニ嘘を云う？　嘘とはなんだ！」
「嘘じゃねえかよ、ねえ親方、なんのお前さんや源公が、紫錦さんの居場所を知ってるものか。大嘘吐きのコンコンチキさね。こっちはちゃあんと見透しだあ」
トン公は小気味よく喝破してから、「ねえ親方、嘘だと思うなら、荒筋を摘まんで話してもいい。聞きなさるか、え、親方（おやかた）？」
　文は返辞をしなかった。
「まずこうだ、しかも今日、お前さんとそうして源公とが、観音堂の横っちょで、エテ物を踊らせていたっ

てものだ。するとそこへ遣って来たのが、令嬢姿の紫錦さんよ。で、早速源公が後をつけたというものだ。そうさ、ここまでは成功だ。だが、後が面白くねえ、そうさ、途中でまかれたんだからな。アッハハハ、いい面の皮さ。……だから親方にしろ源公にしろ、紫錦さんの居り場所なんか、知ってるはずはねえじゃあねえか。へん、この通り、見透しだあね」
文は返辞をしなかった。事実は返辞が出来なかった。それというのもトン公の言葉が一々胸にあたるからであった。
「トン公！」とうとう喚くように云った。「昔の親

方の恩を忘れ、襟元へ付こうって云うんだな。覚えていろよ、いい事アねえぞ」

「覚えているとも」とトン公は笑い、「悪いことは云わねえ帰った方がいい。そうだ足下の明るいうちにね」

云い捲くられた釜無しの文は、縹緻（きりょう）を下げて帰ることになった。

　足音が門口から消えた時、「爺つぁん」は深い溜息をした。

「……すんでに瞞される所だった。トン公、ほんとに有難うよ」

「ナーニ」と云ったがトン公は、頭の繃帯を手でさぐ

り、「どうもいけねえ、まだ痛えや。……だがね「爺つあん」実の所はね、紫錦さんは浮雲（あぶね）えんだよ」
「え、どうしてだい？　どうして浮雲えな？」
「源公の野郎ヤケになって、江戸中探しているらしいんだ。それで今夜もぶつかったたって訳さ。この頭の傷だって、つまり何だ、その時の土産（みやげ）さ。……あれいけねえ、まだ痛えや！」怨めしそうな顔をした。

〽よし足引の山めぐり、四季のながめも面白や、

梅が笑えば柳が招く、風のまにまに早蕨(さわらび)の、手
　を引きそうて弥生山(やよい)……

その翌日の午後であったが、小堀義哉(こぼりよしや)は裏座敷で、清元(きよもと)の『山姥(やまうば)』をさらっていた。

と、襖がつつましく開いて、小間使いのお花が顔を出した。

「あの、お客様でございます」

「お客様？　どなただな？」

「伊丹屋(いたみや)の娘だと仰有(おっしゃ)いまして、眼の醒(さめ)るようなお美しい方が、駕籠でお見えでございます」

「ああそうか、通すがよい」

間もなく部屋へ現われたのは、盛装をしたお錦であった。

「お錦殿か、よく見えられたな」義哉は愛想よく声を掛けた。

「昨夜はお助け下されまして、お蔭をもちまして危難を遁がれ、何とお礼を申してよいやら」

お錦は手をついて辞儀をしたが、「お礼にあがりましてござります」

其処へ小間使いが現われて、頂戴物の披露をした。

「それはそれはご丁寧に。そんな心配には及ばなかったものを」義哉はかえって気の毒そうにした。

一人は美男の若侍、一人は妖艶な町娘、それに男は武士とは云っても、清元の名手で寧ろ芸人そうして女は其昔は女軽業の太夫である。それが春の日の閑静な部屋に、二人だけで向かい合っているのであった。

二人はしばらく黙っていた。蒸されるような沈黙であった。

「おおそうそう、杉の手箱をお預かりしてあったはず、お持ち帰りになられるかな」やがて義哉はこう云って、ものしずかに立ち上りかけた。

「ハイ」と云ったが、周章(あわ)てて止め、「ご迷惑でないようでございましたら、その手箱はもう少々お預かりな

されて下さいますよう」
「ははあ左様か、よろしゅうござる」
この手箱がありさえしたら、これから度々この娘が、訪ねて来ないものではない。何と云っても美しい娘で、美人を見るということは、悪い気持のものではない。……これが義哉の心持だった。それで、承知したのであった。話の口が切れたので、すぐに義哉は追っかけて訊いた。
「由ありそうな杉の手箱、何が入れてありますかな？」
「さあ何でございましょうか」お錦は一向平気で云った。「戴いたものでございますの」

「ほほう左様で、誰人(どなた)からな？」
「ハイ、見知らぬ老人から」
「見知らぬ老人から？　これは不思議」
「ほんとに不思議でございますの。……昨夜あれから参りました、瓦町(かわらまち)の古家で、気味の悪い老人から、戴いたものでございます」
「ふうむ」と云ったが小堀義哉は、にわかに興味に捉えられた。
で、立ち上って隣室へ行き、袋戸棚の戸をあけて、杉の手箱を取り出して来た。それから仔細に調べたが、
「この箱は杉ではない」先づこう云って首を傾げた。

「杉でないと仰有いますと？」
「杉材としては持ち重りがする。鐵で作った箱の表皮へ、杉の板を張り付けたもので、しかも日本の細工ではない。支那製か南蛮製だ」
「マアさようでございますか」お錦も興味を感じてきた。
「ひとつ、開けて見ましょうかな。おおここに鍵穴がある。さて鍵だがお持ちかな？」
「ハイ、うちにならございます」
「では明日にでも持って来て、ともかくも開けて見ましょうかな」

「そういうことに致しましょう」

ここで話がちょっと切れた。

もう夕暮に近かった。庭の築山では吉野桜が、微風にもつれて散っていた。パチッ、パチッと音のするのは、泉水で鯉が躍ねるのであった。

何気なくお錦は庭を見た。往来と境の黒板塀にかなり大きな節穴があったが、そこから誰か覗いているとたしか見えてギラギラ光る眼が見えた。

「あれ！」とお錦の叫んだ時には、もうその眼は消えていた。

やがて夕暮がやって来た。お暇をしなければならなかった。充分の未練を後へ残し、お錦は駕籠で帰って行った。

「よこしまの美であろうとも、美人はやっぱり好ましいものだ」

義哉(よしや)はこんなことを想いながら、部屋に残っている脂粉の香に、うっとりと心をときめかした。

思い出して三味線を取り上げると、さっきの続きを弾き出した。

〽雁がとどけし玉章(たまづさ)は、小萩のたもとかるやかに、へんじ紫苑(しおん)も朝顔の、おくれさきなるうらみわび……

ちょうどここまで引いて来た時、どうしたものか一の絃が、鈍い音を立ててブッツリと切れた。
「これはおかしい」と云いながら三味線の棹を膝へのせ、義哉は小首をかたむけた。
「一の絃の切れるのは、芽出度いことになっているが、どうもそうとは思われない」彼は何となく不安になった。「変ったことでもなければよいが」
帰って行ったお錦のことが、妙に気になってならな

かった。で、三味線を搔いて遣ると彼は急いで立ち上った。

「お花お花」と小間使を呼び「ちょっと私は出てくるからね。この手箱をしまっておくれ」

云いすてとつかわ家を出ると、愛宕（あたご）下の方へ足を向けた。

暮れそうで暮れない春の日も、愛宕下へ来た頃には、もうすっかり暮れてしまって、人の顔さえさだかでなかった。その時こんもりと繁り合った、林の中から云い争うような男女の声が聞こえてきた。

さてこそ！　というような気持がして、義哉はそっ

ちへ走って行った。
　そこは林のずっと奥で、丘になろうとする傾斜地であったが、香具師（やし）風をした八九人の男が、一人の娘を真中に取り込め、口汚く罵っていた。その娘はお錦であった。それと見て取った小堀義哉は、足音荒く走り寄ったが、
「この破落戸（ならずもの）！」と一喝した。
　しかしこれは悪かった。破落戸のうち四五人の者が、急に彼の方へ向かって来た。そうして後の四五人は、お錦を宙へ吊るすようにして、一散に丘の方へ走り出した。ならずものなどと声をかけずに、忍び寄って一

刀に、彼らの一人を斬ったなら、彼らは恐れて逃げたかもしれない。
　義哉へ向かった破落戸達は、いずれも獲物を持っていた。そうして人数も多かった。無手であしらうのは困難であった。そこで義哉も刀を抜いた。
　義哉は芸人ではあったけれど、武術もひととおりは心得ていた。しかし勿論名人ではなかった。とはいえ四五人の破落戸ぐらいに、退(ひ)けを取るような未熟者でもなかった。
　しかし彼の心持は、この時ひどく混乱していた。娘を助けなければならないからであった。

彼は平和好きの性質からいえば、人を斬るのは厭であり、峯打ちぐらいで済ましたかったが、しかしそうはいかなかった。破落戸どもの抵抗は、思ったよりも強かった。

「チェッ」と一つ舌うちをすると、真先に進んで来た破落戸の右の手首へ斬り付けた。

侍でない悲しさに、斬り付けられた破落戸は、ワーッと叫ぶと尻もちを突いた。踏み込んで行って斬り付けるのは、容易なことではあったけれど、義哉はそうはしなかった。ビューッと刀を振り廻し、

「まだ来る気か！」と威嚇した。

これは非常に有効であった。ワーッと叫ぶと破落戸どもは、手負い［＃「手負い」は底本では「手負ひ」］の仲間を捨てたまま、パラパラと四方へ逃げ散った。

その隙に義哉は走り出した。

朧ろの春の月影に、丘の方を透かして見ると、お錦をかどわかした一団は、今や丘を上りきり、向う側へ下りようとしていた。

で、血刀をさげたまま彼はその後を追っかけた。しかし頂上まで来た時には、彼等の一団は丘を下り、巴町（ともえちょう）の方へ走っていた。

そこで彼も丘を下り、彼らの後を追っかけて行った。

夜の静寂を驚かせ、彼らの走る足音は、家々の戸に反響したが、さてその戸を引き開けて、事件の真相を知ろうというような、冒険好きの者はいなかった。この頃は幕府も末の末で、有司の威令は行なわれず、将軍の威厳さえほとんど傾き、市中は文字通り無警察で、白昼切取強盗さえあった。

そこで、市民は日中さえ、店を開こうとはしないほどであった。

その時、破落戸の一団は、にわかに大通りから横へそれた。で、義哉もその後を追い、狭い露路を左へ曲がった。

曲がって見て彼はアッと云った。露路は浅い袋路なのに、彼らの姿がどこにも見えない。
彼は棒立ちに突立った。それから仔細に辺りを見た。

16

左と右は板壁で、出入口らしいものは一つもなく。[#「。」はママ]ただ正面に古びた家が、戸口を向けて立っていた。
「ああ、あの家へ入り込んだな」
こう思った彼は走り寄ると、躊躇なく表戸へ手を掛

けた。すると意外にもスルリと開いた。内へ入って見廻すと、空家と見えて人影もなく、家具類さえ［＃「さえ」は底本では「さへ」］見あたらない。

裏にも一つの出入口があって、その戸がなかば開いていた。

「うん、あそこから抜け出したのだな」

で、彼はその口から、急いで外へ出ようとした。すると、その戸がにわかに閉じ、閂（かんぬき）を下す音がした。

「しまった！」と叫ぶと身を翻えし、入って来た口から出ようとした。するとその戸も外から閉ざされ、閂のかかる音がした。

もう出ることは出来なかった。彼は監禁されてしまった。

こんな場合の彼の心に、よくあてはまる形容詞といえば「茫然」という文字だろう。実際彼は茫然として、暗黒の家内に突立っていた。

しかしいつまでも茫然として、突立っていることは出来なかった。抜け出さなければならなかったし、追っかけなければならなかった。いやいやそれよりこうなってみれば、先ず何より自分自身の、安全を計らなければならなかった。

「戸を破るより仕方がない」そこで彼は全力を集め、

裏戸へ体をぶっつけた［＃「ぶっつけた」は底本では「ぶっつけた」］。
　途端に人声が聞こえてきた。
「こっちでござる。お入りなされ」
　ギョッとして四辺（あたり）を見廻すと、一筋の火光が天井から、斜に足許へ射していた。二階から来た燈火（あかり）である。ぼんやりと梯子段も見えている。その梯子段の行き詰まりに、がんじょうな戸が立ててあり、それが細目にあけられた隙から火光が幽（かすか）に洩れていた。
「それでは空家ではなかったのか」こう思うと彼は心強くなった。それと同時に案内も乞わず、他人の家へ

入り込んだことが、申し訳なくも思われた。

「こちらへ」

という声が聞こえた。

そこで彼は階段を上った。

思わず彼はあっと云った。二階の部屋の光景が不思議を極めていたからであった。そこには十人の男がいた。一人は按摩、一人は瞽女（ごぜ）、もう一人は琵琶師、もう一人は飴屋、更に、居合抜に扮したもの、更に独楽師（こまし）に扮したもの、又は大工又は屑屋、後の二人は商人風に、縞の衣裳を着ていたが、いずれも鋭い眼光や、刀を左右に引き付けている様子で、武士であるこ

とが見て取られた。
そうして彼らの真中に一葉の図面が置かれてあったが、他ならぬ千代田城の図面であった。
「これは浪士だ！　浪士の密会だ！」早くも察した小堀義哉は戦慄せざるを得なかった。
浪士達の方でも驚いたらしく、互に顔を見合わせたが、
「これは人違いだ。本庄氏ではない」琵琶師に扮した一人が云った。
「貴殿は一体何者かな？」
「拙者は旗本、小堀と申すもの、人を追っ駆けて参っ

たものでござる」義哉は正直に打ち明けた。
「実は空家と存じましてな」
「左様、ここは空家でござる。……幽霊屋敷で通っている。外桜田の毛脛（けずね）屋敷でござる」
　これを聞くと小堀義哉［＃「義哉」は底本では「直哉」］は、「ああそうか」と思わず云った。天井から毛脛が下がって来て悪戯をするという所から、外桜田［＃「外桜田」は底本では「下桜田」］の毛脛［＃「毛脛」は底本では「下脛」］屋敷と呼ばれ、いつまで経っても住手のない家が、一軒あるという噂は、既に以前に聞いていた。
「はああそれでは浪士どもが、集会の用に立てようため、

そんな気味の悪い噂を立て、人を付近に近寄せないのだな」こう考えて来ていよいよ義哉は身の危険に戦慄(おのの)いた。

その時浪士たちは顔を寄せ合い、しばらくヒソヒソ相談したが、

「さて小堀義哉氏とやら、我々を何と覚しめすな?」

琵琶師風の一人がやがて云った。

「姿はさまざまに俏(やつ)しては居れど、浪士方と存ぜられます」

「いかにも左様、浪士でござる。……何の為の会合とおぼしめすな?」

「それはトント存じませんな」
「この図面、ご存知かな？」
琵琶師は図面を指差した。
「千代田の城の図面でござろう」
すると浪士は頷いたが、
「実は我ら千代田城へ、火を掛けようと存じましてな。
それで会合をして居るのでござる」
家常茶飯事でも話すように、こう浪士はスラスラと
云った。そうしてじっと眼を据えて、義哉の顔を見
守った。

主君も主君将軍家の城を、焼打ちにしようというのであるから、これが普通の幕臣なら、カッと逆上るに違いない。

勿論義哉もカッとなった。しかし義哉は芸人であって、忍耐性に富んでいた。それで、別に顔色をかえず、冷やかに相手を見返した。

「小堀氏、何と思われるな？」

琵琶師風の浪士は嘲笑うように「さぞ憤慨に堪えられますまいな」

「破壊、放火、殺人というようなことは大嫌いでござる。こういう意味から云う時は、勿論貴所方の計画を、快く思うことは出来ませんな」義哉は憚らず思う所を云った。

「将軍に対する反逆については?」

「それとてよくはござらぬな。しかし、大勢というものは、多数の意嚮に帰するものでござる。天下は一人の天下ではなく、即ち天下の天下でござる、いや、帝の天下でござる」

「しかし、貴殿は旗本とのこと、すれば将軍は直接の主君、それに反抗するこの我々をさぞ憎く覚し召さ

りょうな？」
「さようでござる、普通にはな」義哉は敢て興奮もせず「しかしそれより実の所は、勤王、左幕の衝突の結果、世間がいつ迄もおちつかず、その為芸道の廃れを見るのが、拙者にとっては残念でござるよ」
「ナニ、芸道とな？　何の芸道？」
「清元、常磐津、長唄、新内、その他一般の三味線学でござる。日本古来よりの芸道でござる」
これを聞くと浪士達は、一度にドッと笑い出した。それから口々に罵った。
「アッハハハ、沙汰の限りだ。こういう武士があれば

こそ、徳川の天下は亡びるのだ」
「両刀をたばさむ武士たるものが、遊芸音曲に味方するとは、さてさて武士道もすたれたものでござるな」
「諸君、そういったものでもない」こう静かに止めたのは、例の琵琶師風の浪士であった。どうやら一座の頭目らしい。グイと義哉の方へ膝を進めたが、
「いや仰せごもっともでござる。武道であれ遊芸であれ、人の世に必要があればこそ、産れもし繁栄も致すので、この世に用のないものなら、産れもせねば繁昌もしまい。せっかく栄えた遊芸道が、衰退に向うということは、それを愛する人々にとり、遺憾であるに相

違ござらぬ。……がそれはともかくとして、たとえ偶然であろうとも、我らが集会へ突然参られ、一切の秘密を知ったからは、お気の毒ながら安穏に、お帰しすることは出来ませんでな」

さも笑止だというように、こう云うとその浪士は微笑した。

どうせ無事ではあるまいと、ひそかに覚悟はしていたものの、いよいよこのように明かされてみれば、義哉としても恐ろしかった。彼は下俯向き、黙って唇を噛みしめた。

「しかし貴殿はたった一人、それに反して我らは十人、

一度にかかっては後の人に、卑怯の譏りを受けるでござろう。そこで一人ずつの真剣勝負、最初に拙者がお相手致す、お立合い下さることとなりますまいかな」
言葉は丁寧ではあったけれど、語韻に云われぬ殺気があって、義哉の心をおびやかした。
「その立合いなら無駄でござる」やがて義哉は冷やかに云った。
「ほほう、それは何故でござるな？」
「なぜと申して、立ち合ったが最後、負けるに相違ござらぬからな」
「ふうむ、それで、厭とおっしゃるか」さも案外だと

云うように、
「しかし、それでは卑怯でござるぞ」
「負けると知って剣を合わせ、万一の僥倖を期する者こそ、即ち卑怯と申すもの。拙者はそれとは反対でござる」
「なるほど」と浪士はそれを聞くと、どうやら感心したらしかった。「と申してこのままお帰ししては、秘密の洩れるおそれがある。いよいよお立合い下さらぬとあっては、お気の毒ながら一刀の下に……」
「よろしゅうござる、お斬りなされ」
いよいよ不可（いけ）ないと知ってからは、却って捨身の度

胸が定（き）まり、義哉の心は澄み返った。そこで、膝へ両手を重ね、頸をグイと前へ延ばした。

それと見てとると例の浪士は、やおら立ち上って太刀を抜いたが、「神妙のお覚悟感じ入ってござる、何か遺言はござらぬかな」

「左様」と云って首をかしげたが「ちょっと三味線をお貸し下され」

ここに至って浪士どもは、唖然たらざるを得なかった。

「何になさるな？」と例の浪士が訊いた。

「中途で弾き止めた清元の『山姥（やまうば）』、今生（こんじょう）の思い出に

了(お)えとうござる」
「ははあ」と云うと例の浪士は、仲間の者と眼を見合わせたが、やがて頤で合図をした。瞽女(ごぜ)に扮した浪士の一人が、そこで三味線を押しやった。
艶(えん)に床(ゆか)しい三味線の音色が、毛脛屋敷から洩れたのは、それから間もなくのことであった。

18

ちょうど同じ夜のことであったが、芝三田の義哉(よしや)の家では、奇怪な事件が行なわれた。主人義哉が出かけ

て行った後、小間使のお花は雇女（ばあや）と一緒に、台所で炊事を手伝っていた。
と、口笛の音がした。
物みな懐かしい春の宵で、後庭では桜が散っていた。ヒューヒューと鳴る口笛の音も春の夜にはふさわしかった。
しかしその時、居間の方で、変にカキカキいう音がした。
「おや」とお花は聞耳を立てたが、手に葱（ねぶか）を持ったまま、急いでそっちへ行ってみた。
一匹の奇形な動物が、背を蜒（うね）らして走り廻っていた。

犬のように大きな鼬であったが、口に手箱を銜えていた。

「あっ」とお花は悲鳴をあげ、無宙で葱を投げつけた。鼬の何よりも嫌いなのは、刺戟性の葱の匂であった。それで、鼬は一跳ね跳ねると、食わえていた手箱を振り落し、庭の茂へ走り込んだ。

「ああ恐かった」と溜息をしながら、お花はしばらく立ち縮んだものの、気が付いて手箱を取り上げた。

彼女は利口な女であった。鼬が手箱を狙ったのは偶然ではあるまいと推量した。そこで、手箱を持ったまま女中部屋の方へ入って行った。ふたたび彼女が現わ

れた時には、風呂敷に包んだ小さな箱を、大事そうに両手で捧げていた。そうして主人の居間へ行くと、袋戸棚をそっと開け大切そうに藏（しま）い込んだ。

お花の聡明な心遣いが、無駄でなかったということは、その夜が更けてから証明された。

庭の茂が幽（かすか）に揺れると、香具師（やし）風の若者が手拭でスッポリ顔を隠し、刻み足をして現われたが、ぴったりと雨戸へ身を寄せた。

こういうことには慣れていると見え、二三度小手を動かしたかと思うと音もなく雨戸がスルスルとあき、横縁が眼前に現われた。その向こうに障子が見え、そ

れを開けると義哉の居間で、主人がいないにも拘らず燈火(あかり)がポッと射していた。

香具師風の若者は、膝で歩いて障子へ寄り、内の様子をうかがったが、誰もいないと確かめると躊躇せず障子を引きあけた。それからスックリ立ち上ると袋戸棚の前へ行き、手早く箱を取り出した。

その時人の気勢(けはい)がした。

あわてた彼は盗んだ箱を手早く懐中へ捻じ込んだが、もう足音を忍ぼうともせず、縁から庭へ飛び下りた。

ざわざわと茂みの揺れる音、つづいて口笛の音がしたが、後は寂然としずかになった。引き違いに居間へ

現われたのは、例の小間使いのお花であって、先ず静かに雨戸をとじ、それからしとやかに障子をしめた。

見れば手箱を持っている。

乙女に有り勝ちの好奇心が、彼女の心に湧いたのであろう、燈火（ともしび）の前へ坐りこむと、先ず髪から簪を抜き、その足を鍵穴へ差し込んだ。しかし錠前は外れなかった。

で、手箱を膝の上へのせ、しばらくじっと考え込んだ。

見る見る彼女の眼の中へ燃えるような光が射して来た。

彼女は突然叫び出した。「泥棒（どろぼう）でございます泥棒でございます！」

そうして手早く杉の手箱を自分のふところへ捻じ込んだ。

けたたましい声に仰天して、家の人達が集まって来たのは、その次の瞬間のことであったが、いかさま縁にも座敷にも泥足の跡が付いているので、賊の入ったことは証拠立てられた。

そこで八方へ人が飛んだ。しかし賊は見付からなかった。

そうして何を盗まれたものか、かいくれ見当がつか

なかった。
と云うのは金にも器類にも、紛失したものがないからであった。

19

ちょうど同じ夜の出来事である。
岡山頭巾で顔を包んだ、小兵の武士が供もつれず、江戸の街を歩いていた。
すると、その後を従ける様にして、十人ばかりの屈強の武士が、足音を盗んで近寄って来た。

覆面の武士は幕府の重鎮勝安房守安芳(かつあわのかみやすよし)で、十人の武士は刺客なのであった。

今日の東京の地図から云えば、日本橋区本石町(ほんごくちょう)を西の方へ向かって歩いていた。室町を経て日本橋へ出、京橋を通って銀座へ出、尾張町の辻を真直ぐに進み、芝口の辻までやって来た。

この間二三度刺客達は、討ち果そうとして走りかかったが、安房守の威厳に搏(う)たれたものか、いつも途中で引き返してしまった。

だが一体何のために勝安房守を殺そうとするのだろう？　そうして一体刺客達は、どういう身分の者なの

だろう。
それを知りたいと思うなら、当時の歴史を調べなければならない。
慶応（けいおう）三年九月であったが、土佐（とさ）の山内容堂（やまのうちようどう）侯は、薩長二藩が連合し討幕の計略をしたと聞き、これは一大事と胸を痛めた。そこで一通の建白書を作り、後藤象二郎（ごとうしょうじろう）、福岡孝悌（ふくおかこうてい）、この二人の家臣をして将軍慶喜に奉（たてまつ）らしめ、平和に大政を奉還せしめ、令政をして一途に出でしめ、世界の大勢に順応せしめ、日本の国威を揚げしめようとした。そこで慶喜は十月十三日、京都二条城に群臣を集め、大政奉還の議を諮詢（しじゅん）した。

その結果翌十四日、いよいよ大政奉還の旨を朝廷へ対して奏聞（そうもん）した。一日置いた十六日朝廷これを嘉納した。つづいて同月二十四日、慶喜は更に将軍職をも、辞退したき旨奏聞したが、これは保留ということになった。

さて一方朝廷に於ては、施政方針を議定するため、小御所（こごしょ）で会議を行なわせられた。中山忠能（なかやまただよし）、正親町實愛（おおぎまちさねなる）、徳大寺實則（とくだいじさねのり）、岩倉具視（いわくらともみ）、徳川慶勝（とくがわよしかつ）、松平慶永（まつだいらよしかげ）、島津義久（しまづよしひさ）、山内容堂（やまのうちようどう）、西郷隆盛（さいごうたかもり）、大久保利通（おおくぼとしみち）、後藤象二郎（ごとうしょうじろう）、福岡孝悌（ふくおかこうてい）、これらの人々が参会した。十二月八日のことであった。その結果諸般の改革を見、翌九日、天皇親臨（しんりん）、王政復古の大号令を下され、徳川

幕府は十五代、二百六十五年を以て、政権朝廷に帰したのであった。

慶喜に対する処置としては、内大臣を辞すること、封土一切を返すべきこと、この二カ条が決定された。

旧幕臣は切歯した。慶喜としても快くなかった。会桑（かいそう）二藩は特に怒った。突然十二月十二日の夜慶喜は京都から大坂へ下った。松平容保（かたもち）、松平定敬（さだよし）、他幕臣が従った。

こうして起ったのが維新史に名高い伏見鳥羽の戦いであった。明治元年正月三日から、六日に渡って行なわれたのであった。そうして幕軍大いに潰（つい）え、六日夜

慶喜は回陽丸に乗じ、海路江戸へ遁竄（とんざん）した。

　ここでいよいよ朝廷に於ては、慶喜討伐の大軍を起され、江戸に向けて発することにした。有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと）親王を征東大総督（せいとうだいそうとく）に仰ぎまつり、西郷隆盛（さいごうたかもり）参謀、薩長以下二十一藩、雲霞（うんか）の如き大軍は東海東山（とうかいとうざん）、北陸から、堂々として進出した。そうして三月十五日を以て、江戸総攻撃と決定された。

　江戸はほとんど湧き返った。旗本八万騎は奮起した。薩摩と雌雄を決しようとした。しかし聡明な徳川慶喜は、惰弱に慣れた旗本を以て、慓悍な薩長二藩［＃「薩長二藩」は底本では「薩摩二藩」］の兵と、干戈（かんか）を交える

ということの、不得策であることを察していた。それに外国が内乱に乗じ、侵略の野心を逞しゅうし、大日本国の社稷をして危からしめるということを、特に最も心痛した。そこで幕臣第一の新知識、勝安房守に一切を任せ、自身は上野の寛永寺に蟄居し、恭順の意を示すことにした。

初名義邦、通称は麟太郎、後安芳、号は海舟、幕末従五位下安房守となり、軍艦奉行、陸軍総裁を経、さらに軍事取扱として、幕府陸海軍の実権を、文字通り一手に握っていたのが、当時の勝安房守安芳であった。武術は島田虎之助に学び、蘭学は永井青涯に師事し、

一世を空うする英雄であったが、慶喜に一切を任せられるに及び、大久保一翁、山岡鐵舟などと、東奔西走心胆を砕き、一方旗本の暴挙を訓め、他方官軍の江戸攻撃を食い止めようと努力した。

幕臣の中過激な者は、その安房守の遣り口を、手ぬるいと攻撃するばかりでなく、徳川を売って官軍に従く獅子身中の虫だと云って、暗殺しようとさえ企てた。

それを避けなければならなかった。

日々幕兵は脱走した。それを引き止めなければならなかった。

で、この夜もただ一人府内の動静を探ろうとして、

こうして歩いているのであった。

20

芝口の辻を北へ曲がり安房守(あわのかみ)は悠々と歩いて行った。下桜田(しもさくらだ)［＃「下桜田」はママ］まで来た時であった。ふ、と彼は足を止めた。その機会を狙ったのであろう、刺客の一人が群を離れ、颯(さつ)と安房守の背後に迫った。

と、突然安房守が云った。

「うむ、日本は大丈夫だ！　この騒乱の巷の中で、三味線を弾いている者がある。うむ、曲は『山姥(やまうば)』だな。

……唄声にも乱れがない。撥(ばち)さばきも鮮(あざやか)なものだ。……いい度胸だな。感心な度胸だ。人は須(すべから)くこうなくてはならない。蠢動するばかりが能ではない。亢奮するばかりが能ではない。宇内(うだい)の大勢も心得ず、人斬包丁ばかり振り廻すのは人間の屑と云わなければならない。……いい音締だな小気味のよい音色だ」

それは呟いているのではなく、大声で喋舌(しゃべ)っているのであった。背後に迫って来た刺客の一人へ、聞かせようとして喋舌っているらしい。

宵ながら町はひっそりと寂れ、時々遙かの方角から脱走兵の打つらしい小銃の音が響いてきたが、その他

には犬の声さえしない。

その静寂を貫いて、咽ぶがような、清元の音色が、一脈綿々と流れてきた。

刺客の一人は立ち止まり、じっと安房守を見守った。その安房守は背を向けたまま、平然として立っていた。まことに斬りよい姿勢であった。一刀に斬ることが出来そうであった。

それだのに刺客は斬らなかった。一間ばかりの手前に立ち、ただじっと見詰めていた。彼は機先を制されたのであった。叱咤するような安房守の言葉に、強く胸を打たれたのであった。しかし今にも抜き放そうと

して、しっかり握っている右の手を柄から放そうとはしなかった。
「斬らなければならない！　たたっ斬らなければならない！　二股武士、勝安房守（かつあわのかみ）［＃「勝安房守（かつあわのかみ）」は底本では「勝安房安（かつあはのかみ）」］！　だが不思議だな、斬ることが出来ない」
刺客の心は乱れていた。
と、唄声がはっきり聞こえた。
〽雁がとどけし玉章（たまづさ）は、小萩の袂（たもと）かるやかに、返辞（へんじ）しおんも朝顔の、おくれさきなるうらみわび……
安房守は立っていた。同じ姿勢で立っていた。それ

からまたも喋舌り出した。
「女ではない、男だな。しかも一流の太夫らしい。一流となれば大したものだ。政治であれ剣道であれ、遊芸であれ官教であれ、一流となれば大したものだ。もっとも中には馬鹿な奴もある。剣技精妙第一流と、多くの人に立てられながら、物の道理に一向昏く無闇と人ばかり殺したがる。この安芳をさえ殺そうとする。馬鹿な奴だ。大馬鹿者だ。今この安芳を暗殺したら、慶喜公の御身はどうなると思う。徳川の家はどうなると思う。俺は官軍の者どもに、お命乞いをしているのだ。慶喜公のお命乞いを。……俺の命などはどうなっ

てもよい。俺はいつもこう思っている。北条義時（ほうじょうよしとき）に笑われまいとな。実に義時は偉い奴だ。天下泰平のそのためには、甘んじて賊臣の汚名を受け、しかも俯仰天地（ふぎょうてんち）［＃「俯仰天地」は底本では「俯抑天地」］に恥じず、どうどうと所信を貫いた。……俺は義時に則（のっと）ろうと思う。日本安全のそのためには、小の虫を殺し大の虫を助け、敢て賊子（ぞくし）に堕ちようと思う。……どだい薩長と戦って、勝てると思うのが間違いだ。いかんともしがたいは大勢だ。社会の新興勢力は、どんなことをしても抑制出来ぬ。王政維新は大勢だ。幕府から人心は離れている。それはもう旧勢力だ。利益のなく

なった偶像だ。徳川の天下も二百六十年、そろそろ交替していい時だ。偶像を拝(おが)むのは惰性に過ぎない。こびり付くのは愚の話だ。新時代を逃がしてはいけない。日本を基礎にした世界主義！　国家を土台にした国際主義！　これが当来の新思想だ。仏蘭西(フランス)を見ろ仏蘭西を！　ナポレオン三世の奸雄(かんゆう)振のいかに恐ろしいかを見るがいい！　日本の国土を狙っているのだ。内乱に乗じて侵略し、利権を得ようと焦(あせ)心っているではないか。それだけでも内乱を止めなければならない。……第一江戸をどうするのだ。罪のない江戸の市民達を。兵戦にかけて悔いないのか。いやいやそれは絶対にい

けない。江戸と市民は助けなければならない。そうして徳川の大屋台と慶喜公とは助けなければならない。……どいつもこいつも血迷っている。醒めているのは俺だけだ。俺がそいつらを助けなかったら、一体誰が助けるのだ。俺を絶対に殺すことは出来ぬ。殺したが最後日本は闇だ。……官軍の中にも解（わか）る奴がいる。他でもない西郷だ。西郷吉之助ただ一人だ。で俺はきゃつに邂逅（ゆきあ）い、赤心を披瀝して談じるつもりだ。解ってくれるに相違ない。そこで江戸と江戸の市民と、徳川家と慶喜公とは、助けることが出来るのだ。その結果内乱は終息し、日本の国家は平和となり、上下合一、

官民一致、天皇帰一、八紘（こう）一宇（う）、新時代が生れるのだ」

21

安房守（あわのかみ）［＃ルビの「あわのかみ」は底本では「あはのかみ」］はじっと耳を澄ました。

空では星がまばたいていた。ふと小銃の音がしたが、しかしたった一発だけであった。

清元（きよもと）の唄はなお聞えた。

「ああいいなあ。名人の至芸（しげい）だ」安房守は嘆息した。

それから大声でやり出した。「俺はもとからの江戸っ

子だ。俺の好きなのは平民だ。勝麟太郎（かつりんたろう）、これでいいのだ。つめて云うと勝麟だ。従五位も無用なら安房守も無用だ。勝麟々々これでいいのだ。だがそう云ってはいられない。勝麟では済まされない。世間の奴らが酔っていて、俺一人醒めているからよ。そこで救世と出かけたのだ。厭な役廻りだがしかたがない。扶桑（ふそう）第一の智者と称し、安房の国の旋陀羅（せんだら）の子、聖日蓮（セントにちれん）［＃「日蓮」は底本では「日連」］は迫害を覚悟で、世の荒波へ飛び出して、済民（さいみん）の法を説いたではないか。現代第一の智者と云えば、この俺の他にはない。つまり俺は日蓮なのだ。つまり俺は祖師（そし）なのだ。その祖師様を殺そ

うとは、とんでもない不届者だ。すぐに仏罰を蒙ろうぞ。……ああ、だが、本当に、いい音色だなあ。……」

春の夜風がそよぎ出した。

手近の木立で小鳥が啼いたが、きっと夢でも見たのだろう。

なまめかしい春の夜の、甘い空気を顫わせて、艶な肉声と三味線の音とは、なおあざやかに聞こえていた。

刺客は頭をうな垂れた。柄を握っていた右の手は、いつかダラリと下っている。と、一足しりぞいた。それからグルリとむきを変えると、もと来た方へ引っ返した。

その時、安房守は振り返った。
「これちょっと待て、伊庭(いば)八郎！」
「はっ」と云うとその刺客は、足を止めて振り返った。うら若い美貌の武士であり、それは伊庭八郎であった。八郎は父軍兵衛(ぐんべい)と共に、この時代の大剣豪、斉藤弥九郎(さいとうやくろう)、千葉周作、桃井春蔵(もものいしゅんぞう)、近藤勇、山岡鐵舟、榊原健吉(さかきはらけんきち)、これらの人々と並称されている。身、幕臣でありながら、道場をかまえて門下を養い、心形刀流を伝えたが、直門二千名に及んだという。
　幕臣も幕臣、奥詰めだったので、親衛隊の魁(さきがけ)であり、伏見鳥羽の戦いにも出て、幾百人となく敵を斬っ

た。
その彼は直情の性格から、同じ幕臣の勝安房守が、いわゆる恭順派の総師として、薩長の士と交渉することを、徳川家のために歯搔く思い、獅子身中の虫と感じ、いっそ暗殺して害をのぞこうと、日頃から画策していたのであったが、この夜いよいよ断行すべく、門下の壮士九人を率い勝安房守の後をつけ、剣を揮おうとしたのであった。
「どうだ、少しは解ったかな？」安房守は微笑した。
しかし八郎は黙っていた。
「ないない」と安房守は穏やかに云った。「勿論全部

は解らないだろう。だがこの俺を殺すことの、理不尽だという事は解ったらしいな」
「はい、さようにございます」伊庭八郎は一礼した。
「見損ないましてございます」
「世の中は近々平和になるよ。だが今後とも小ぜりあいはあろう。幕臣たる者は油断してはならない。八郎、お前、久能山（くのうざん）へ行け！　函嶺（かんれい）の険（けん）を扼（やく）してくれ！」
「それは、何故でございますな？」
「二三日中に西郷と逢う。そうして俺は談判する。俺の言葉を入れればよし、もし不幸にして入れなかったら、幕府の軍艦を一手に集め、東海道の薩長軍を、海

上から俺は殲滅して見せる。函根(はこね)、久能山は大事な要害だ。敵に取られては面白くない。……まあ八郎聞くがいい、どうだ冴え切った三味線ではないか」
「よい音色でございますな」
思わず八郎も耳を澄ました。
遠くで二つバンが鳴っていた。
どこかに火事でもあると見える。
しめやかに三味線はなお聞えた。
にわかに八郎は呻くように云って、
「これは不思議！　剣気がござる！」
「ナニ剣気？　ほんとかな？」安房守は眼を見張った。

「これは只事ではございません」

「お前は剣道では奥義の把持者（はじしゃ）だ。俺などよりずつと上だ。お前がそう云うならそうかもしれない」

「これは危険がせまって居ります」

「ふうむ、そうかな。そうかもしれない」

「これは助けなければなりません」

八郎は背後を振り返り、手を上げて門下を呼んだ。

曲は終りに近づいてきた。

毛脛（けずね）屋敷の床の下に、大きな地下室が出来ていた。

この屋敷が建てられたのは、正保（しょうほ）年間のことであっ

て、慶安謀反の一方の将軍、金井半兵衛正国(かないはんべえまさくに)がずっと住んでいたということであった。で、恐らく地下室は、その時分に造られたものであろう。素行山鹿甚五右衛門(やまがじんごえもん)の高弟、望月作兵衛(もちづきさくべえ)もそこに住み著述をしたということであるが、爾来幾度か住人が変わり、建物も幾度か手を入れられたが、天保(てんぽう)になって一世の剣豪、千葉周作政成の高弟、宇崎三郎が住んだことがあったが、この時代から怪異があったと、翁双紙(おきなぞうし)などに記されてある。本所七不思議のその中にも、毛脛屋敷というのがあるが、それとこれとは別物なのである。

百目蠟燭が地下の部屋の、一所に点っていた。

黄色い光がチラチラとだだっ広い部屋を照らしている。
幽（かすか）ではあったが三味線の音が、天井の方から聞えてきた。
十四五人の人間がいる。
そうして気絶した美しい紫錦が、床の上に仆（たお）れていた。

22

「ふん、こうなりゃアこっちの物さ。……三ピンめ、

驚いたろう」
　こう云ったのは源太夫であった。「だが案外手強かったな、唄うたいにゃ似合わねえ」
「坊主の六めどうしたかな」こう云ったのは小鬢の禿た四十年輩の小男であった。「三ピンめに一太刀浴びせられたが」
「ナーニ大丈夫だ、死りゃアしねえ。死った所で惜しかアねえ」もう一人の仲間がこう云った。
「三ピンめ、さぞかし驚いたろう」源太夫は繰り返した。「よもや地下室があろうとは、仏さまでも知るめえからな。消えてなくなったと思ったろうよ。……

「紫錦（しきん）め、そろそろ目を覚さねえかな」
紫錦は気絶からまだ醒めない。グッタリとして仆（たお）れていた。髪が崩れて額へかかり、蠟燭の灯に照らされていた。
源太夫はじっと見詰めていたが、溜息をし舌なめづりをした。
「だが親方はどうしただろう？」
もう一人の仲間が不安そうに云った。
「大丈夫だよ、親方のことだ、ヘマのことなんかやるはずはねえ」
「それにえて物を連れて行ったんだからな」

「あいつときたら素ばしっこいからな」
二三人の仲間が同時に云った。
地下室は寒かった。蠟燭の灯が瞬(またた)いた。
「酒を呑みたいなぁ」と誰かが云った。
「まあ待ちな、もう直ぐだ。なんだか知らねえが親方が宝箱を持って来るんだとよ」
「何が入っているんだろう？」
「小さな物だということだ」
「で、うんと金目なんだな」
「一度にお大尽(だいじん)になるんだとよ」
「源公！」

と一人が呼びかけた。「ひどくお前は幸福そうだな。思う女を取り返したんだからな。……幸福って物ア直ぐに逃げる。今度逃がしたら取り返しは付かねえ」

源太夫はそっちへ眼をやった。

「ふん、女に惚れているんだな」

「あたりめえだ、惚れてるとも、だから苦心して取り返したんだ」

「だが宜(よ)くねえぜ、そういう惚(ほ)れ方は、古い惚れ方っていうやつだ」

源太夫はその眼を光らせたが

「じゃ何が新らしいんだ」

「お前は承知させて、それからにしようって云うんだろう？　だめだよだめだよそんなことは……」
「俺には出来ねえ、殺生な真似はな」
「じゃあお前は縮尻(しくじる)ぜ」
源太夫は返辞(いらえ)をしなかった。
「叩かれると犬は従(つ)いて来る。撫(さ)すると犬は喰らいつく。……」
源太夫は考え込んだが、突然飛び上り喚声をあげた。
「お前の云うことは嘘じゃねえ！」

この時二階の一室では、最後の節が唄われていた。
小堀義哉（こぼりよしや）の心の中は泉のように澄んでいた。なんの雑念も混じっていなかった。死に面接した瞬間に、人間の真価は現われる。驚くもの恐れるもの、、、、もがくもの泣き叫ぶもの、そうして冷やかに傍観するもの、又突然悟入（ごにゅう）するもの、しかし義哉の心持は、いずれにもはまっていなかった。彼は三味線の芸術境に、没頭三昧することによって、すべてを忘れているのであった。
『山姥（やまうば）』の曲が終ると同時に、彼は死ななければなら

なかった。そうして殺し手が白刃を提げ、彼の背後に立っていた。

時はズンズン経って行った。

もう直ぐ曲は終わるのである。

〽露にもぬれてしっぽりと、伏猪の床の菊がさね……

彼は悠々と唄いつづけた。

異風変相の浪士達にも、名人の至芸は解ると見えて、首を垂れて聞き惚れていた。

独楽師に扮した一人の浪士は「旨い！」と思わず呟いた、居合抜に俏したもう一人の浪士は、「ウーン」と

深い呻声を洩らし、商人に扮した二人の浪士は顔と顔とを見合わせた。

一座の頭領と思われる、琵琶師風の一浪士は、刀の柄を握ったまま堅くその眼を閉じていた。

時はズンズン経って行った。

伊庭八郎とその同志は、勝安房守の指図の下に、毛脛屋敷の表戸を、踏み破ろうと待ち構えていた。

「まず待（ま）つがよい」

と安房守は云った。「めったに聞けない名人の曲だ。唄い終えるまで待つとしよう」

それで、一同は鳴りを静め、三味線の絶えるのを待っ

ていた。

さてそれから行なわれたのが、その当時の人が噂した所の「毛脛屋敷の大捕物」であり、そうして後になってその捕物が「仙人壺」というものに関係あり、と知り、改めて「大捕物仙人壺」と呼んだ、その風変りの捕物であった。

何故この捕物が風変わりであり、何故有名になったかというに、先づ第一にそれを指揮した者が、勝海舟という大人物であり、捕物の衝（しょう）にあたった人物が、伊庭八郎とその門下という、これも高名の人々だったからで。……

そうして捕えられた者共が、千代田城へ放火しようとした精悍な浪士の一群と、当時江戸を騒がせていた、鼬(いたち)使いの香具師(やし)一派という、風変わりの連中であったからである。

しかし捕物そのものは、まことに簡単に行なわれた。即ち伊庭八郎一派の者が、三味線の音の絶えると同時に、毛脛屋敷へ乱入するや、浪士の群は狼狽し、逃げようとして犇(ひし)めくところを、あるいは斬り、あるいは捕縛し、その物音に驚いて、地下室にいた源太夫一味が、周章(あわ)てて遁がれようとするところを、これも斬ったり捕えたりして、一人のこさず狩取った迄であった。

その結果お錦と小堀義哉とは、命を助かることが出来た。

香具師の親方「釜無しの文」だけは、ちょうどそこに居なかったので、これも命を助かった。

その夜の明け方小堀義哉（こぼりよしや）は、自分の屋敷へ帰って来た。そこで盗難の話を聞いた。これという物も盗まれなかったが、お錦（きん）から預かった不思議な手箱を、一つだけ盗まれたということを、小間使のお花から耳にし

た。
「ふうむそうか、ちょっと不思議だな」
義哉は小首を傾けた。「金も取らず衣類も盗まず、手箱を奪ったというのには、何か理由がなければならない」
しかし彼には解(わか)らなかった。
「お錦殿には気の毒だが、打ち明けるより仕方あるまい」
で、お錦の来るのを待った。しかし翌日も翌々日も、お錦の姿は見えなかった。
「ああいう事件があった後だ、多少体を痛めたのかも

しれない」
　無理もないことだと思うのであった。
　その翌日のことであったが、一日暇を戴きたいと、小間使いのお花が云い出した。
「ああいいとも、暇を上げよう。親元へでも帰るのかな」
「はい、あの神田の兄の許へ」
「おおその神田の兄さんとやらは、お上のご用を聞いているそうだな」
「はい、さようでございます」
「ゆっくり遊んで来るがよい」

「はい、それでは夕景まで」
小さい風呂敷の包を抱き、小間使のお花は屋敷を出た。
神田小川町の奥まった露路に、岡引の友蔵の住居があった。荒い格子には春昼の陽が、鮮に黄色くあたっていた。
「嫂さんこんにちわ」と云いながら、お花は門の格子をあけた。
「おやお花さん、よく来たね」声と一緒にあらわれたのは、友蔵の家内のお巻であった。三十前後の仇っぽい女で、茶屋上りとは一眼で知れた。

「これはお土産、つまらない物よ」
「よせばよいのに、お気の毒ねえ」
「それはそうと兄さんはいて。妾ちょっと用があるのよ」
「おお、お花か、何だ何だ」
これは友蔵の声であった。
友蔵は茶の間の長火鉢の前で、湯呑で昼酒を飲んでいた。四十がらみの大男で、凶悪の人相の持主であった。下っ引の手合も今日はいず、一人いい気持に酔っていた。
朝風呂丹前長火鉢、これがこの手合の理想である。

しかし岡っ引の手あてといえば、一月一分か一分二朱であった。それでは小使にも足りなかった。その上岡っ引は部下として、下っ引を使わなければならなかった。その手あてはどこからも出ない。自分が出さなければならなかった。そこで勢い岡っ引は他に副業を求めるか、ないしは地道の町人をいたぶり、賄賂(わいろ)を取らなければ食って行けなかった。

ところで友蔵には副業がなかった。そこで町人を嚇(おど)しては、収賄(しゅうわい)をして生活(くらし)ていた。

「兄さん」とお花は茶の間へ入ると、風呂敷包をサラリと解いた。「見て貰いたいものがありますのよ。こ

の手箱なの、どう思って？」
伊丹屋(いたみや)のお錦が「爺つあん」から貰い、小堀義哉に預けた所の、例の手箱を取り上げた。
「変哲(へんてつ)もねえ杉の箱じゃあねえか、これが一体どうしたんだい？」友蔵は手箱を取り上げた。
「何でもないのよ、見掛けはね。でもちょっと変なのよ」
お花はそこで説明した。
先夜小堀義哉の家へ、変な泥棒が入ったこと、金も衣類も持って行かずに、この箱ばかり狙ったこと、そこで策略を巡らして、泥棒に贋物を握らせた事、そう

して本物は窃（こっそ）りと、自分が隠して置いた事、義賊へ箱を預けたのが、日本橋の大老舗（おおしにせ）、伊丹屋の娘だということなどを、細々（こまごま）と説明したのであった。
「ふうむ、そうかい、なるほどなあ。そう聞くとちょっと不思議だなあ。とんだ手蔓（てづる）にぶつかるかもしれねえ。だが何にしても蓋（ふた）をあけて、中味を拝見しなけりゃあ」
　そこで錠前をコヂ開けようとした。しかし錠は開かなかった。
「こいつアいけねえ、千枚錠だ。どんなことをしても開くものじゃあねえ。千枚錠ときたひにゃあ、合鍵だって役に立たねえ。箱を潰すのはワケはねえが、中

味が何だか解らねえからな、そいつもちょっと手控えだ。……ところで鍵はなかったのかい？」

25

「ええ、それがなかったんですよ」
「探したらどこかにあるだろう。帰って窃り探して見な」
「そうねえ、それじゃ探してみよう」
永い春の日の暮れかかった頃、お花は屋敷へ帰って行った。

数日経ったある日のこと、駕籠に乗った伊丹屋のお錦（きん）が、義哉（よしや）の屋敷へ訪れて来た。

その後やはり気分が悪く、今迄寝ていたということであった。

「これでございますの、手箱の鍵は」

お錦はこう云って鍵を出した。

義哉はそこで事情を話した。

「おや、マアさようでございましたか」お錦は意には介しなかった。元々気味の悪い老人から、偶然貰った手箱なのである。たいして惜しくも思わないのであっ

た。それより彼女には義哉その人が、このもしくも愛(いと)しくも思われるのであった。
二人は尽きず話をした。
伊丹屋の養女だということや、許嫁(いいなづけ)が生地なしだということや、生活(くらし)が退屈だということや、
——お錦はそんなことを問わず語りに話した。
「妾(わたくし)、近々伊丹屋の家を、出てしまうかもしれませんの」
「あなたが伊丹屋のお家を出て、一人住みでもなされたら、江戸中の若い男達は、相場を狂わせるでございましょうよ。……そうして貴女(あなた)は江戸中の女から、妬(そね)

まれることでございましょうよ」
「お口の悪い何を仰有（おっしゃ）るやら。……でもきっと貴郎様は、おさげすみなさるでございましょうね。そうしてもうもうお屋敷へなど、お寄せ付けなされはしますまいね」
「どう致しまして私など、こっちから日参いたします」
「まあ嬉しゅうございますこと、嘘にもそう云っていただけると、どんなに心強いことでしょう」
塀外を金魚売が通って行った。そのふれ声が聞えてきた。それは初夏の訪れであった。
後庭（こうてい）には藤が咲きかけてい、池の畔（みぎわ）の燕子花（えんしか）も、紫

の蕾を破ろうとしていた。
すると、その時縁側の方から、微(かすか)な衣擦れの音がした。
「お花か!!」と義哉は気不味(きまず)そうに云った。
「はい、お呼びかと存じまして」
「呼びはしない。向うへ行っておいで」
お花の立去る気勢(けはい)がした。
鍵を義哉へ預けたまま、お錦も間もなく帰って行った。
その翌日の夕方であった。
神田小川町の友蔵の家へ、お花はとつかわと入って

行った。
「兄さんこれなのよ［＃「兄さんこれなのよ」は底本では「兄さんこれなのよ」」］、手箱の鍵は」こう云ってお花は鍵を出した。
お錦が義哉へ預けて行った、例の手箱の鍵であった。ちょっとの隙を窺って、それをお花が盗み出したのである。
「どれ」と云うと友蔵はお花の手から鍵を取った。それから立ち上って隣部屋へ行き、地袋（じぶくろ）から手箱を取り出して来た。
固唾を呑まざるを得なかった。何が箱から出るだろ

う？　高価な品物であろうかも知れぬ。それとも恐ろしい秘密だろうか？

友蔵は鍵を錠へかった。と、カチリと音がして、箱の蓋がポンと開いた。

一葉の地図が入れてあって、そうしてその他には何にも無かった。

「地図じゃないの、つまらない」

お花はガッカリして声を上げた。

「そうでねえ」と友蔵は云った。彼は岡っ引という商売柄、こういうものには興味があった。そうして恐らくこの地図には、秘密があろうと考えた。

「うむ、こいつあ甲州の地図だ。……ははあ、こいつが釜無川だな。……おおここに記号(しるし)がある」

釜無川の川岸に朱で二重丸が入れてあった。

で、友蔵は腕を組み、じっと何かを考え込んだ。

さてその翌日の早朝であったが、甲州街道を足早に、甲府の方へ下る者があった。他ならぬ岡っ引の友蔵で、厳重に旅の装いをしていた。

すると、その後から見え隠れに、一人の旅人が尾行（つ）けて行った。それを友蔵は知らないらしい。
道中三日を費やして、友蔵は甲府の城下へ着いた。
旅籠へ泊った友蔵は、両掛（りょうがけ）からこっそり地図を出し、あらためて仔細に調べ出した。
すると、隣室の間の襖が、あるかなしかに細目に開き、そこから鋭い眼が見覗（みのぞ）いた。様子を窺っているのであった。
　翌日早朝友蔵は、釜無の方へ出かけて行った。忍野郷（しのぶのごう）を出外れるともう釜無の岸であった。土手に腰かけて一吹（いっぷく）した。それから四辺（あたり）を見廻したが、人の居

るらしい気勢（けはい）もなかった。用意して来た鍬を提（ひっさ）げ地図を見い見い歩いて行ったのは、川の岸寄りの中洲であった。

彼は熱心に掘り出した。やがて何か鍬の先に、カチリとあたる音がした。どうやら小石ではないらしい。手を差入れて引き出して見た。土にまみれた小さい壺が、その指先につつまれていた。

「なんだえこれは壺じゃアねえか。呆れもしねえ莫迦にしていやがる。小判の箱かと思ったに。天道様も聞こえませぬ。一体どおしてくれるんだい。旅費を使って江戸くんだりから、わざわざ甲府へ来たんじゃアね

えか。巫山戯(ふざけ)ているなあ、え、本当に。……だが待てよ、そうも云えねえ。これに秘密があるのかもしれねえ。形は小さい壺ながら、忽然化けて千両箱となる。なあんて奇蹟が行なわれるかもしれねえ。よしよしともかく宿へ帰り、仔細に調べることにしよう」

で、鍬を川へ投げ捨て、壺に着いている土を払うと、懐中へ納めて歩き出した。

夕飯を食べ風呂へ入り、床を取らせると女中を退けた。

それから壺を取り出した。ためつすがめつ調べたが、何の変った所もなかった。丈三寸、周囲三寸、掌に載

る小壺であった。焼にも変った所がない。ただし厳重に蓋が冠せてあって、取ろうとしてもなかなか取れない。

「つまらねえなあ。虻蜂とらずだ」

小言を云いながら振って見たが、中には何にも入っていないと見え、コトリとも音はしなかった。

「一世一代の失敗かな。友蔵親分丸損かな。ほんとにほんとに莫迦にしていやがら」

しかしどんなに悪口を云っても、それに答えるものさえない。自分自身が悪口を云い、自分自身が聞くばかりであった。

夜は次第に更けまさり、家の内外ひっそりとした。
「考えていたって仕様がねえ。こんな晩は寝た方がいい。明日は早速ご出立だ。お花の畜生め覚えていやがれ。彼奴(あいつ)さえあんな物を持って来なけれりゃあ、こんなヘマは見ねえんだ。江戸へ帰ったらあいつを呼び付け、みっしり叱ってやらなけりゃならねえ」
夜具を冠って寝てしまった。
いわゆる丑満の時刻になった。
と、間(あい)の襖(ふすま)が開き、何かチロチロと入って来た。それは一匹の大鼬(いたち)であって、颯(さっ)と床間(とこのま)へ駈け上ると、壺と地図とを両手で抱え、それから後足で立ち上り、静

かに隣部屋へ引返した。
友蔵は勿論知らなかった。しかし翌日発見した。発見はしたが驚かなかった。「へん、間抜けな泥棒め、盗むものに事をかき、あんなつまらねえ物を盗みやがった」
それで、却ってサバサバして、江戸をさして引返して行った。

ここは深川の木賃宿である。香具師（やし）の親方の「釜無

の文」は、手下の銅助を向うに廻し、いい気持に喋舌（しゃべ）っていた。傍に檻が置いてあり、中に大鼬が眠っていた。二人の前には壺と地図とが、大切そうに置いてあった。

　窓から夏の陽が射していて、喚気法の悪い部屋の中は、汗ばむ程に熱かった。

「……と、つまり、云うわけさ。ナーニ、ちょろりと横取りしたのさ。へん、えて物さえ使ったらどんな宝物だって盗まれるんだからな」

　得意そうに文は話し出した。

「ところで親方、その壺には、何が入っているんです

え？」こう不思議そうに銅助は訊いた。姦悪の相の持主で、文に負けない悪党らしかった。
「そいつア俺にも解らねえ」文は渋面を作ったが、「福の神だということだ。とにかくこいつを持っていると、いい目が出るということだ……これはな、伝説による時は、支那から渡ったものだそうな。甲府のお城にあったものさ。元禄（げんろく）時代の将軍家、館林（たてばやし）の綱吉（つなよし）様が、ある時お手に入れられた所、間もなく江戸城お乗込み、将軍職に就かれたそうだ。そのお気に入りの柳沢侯[#「侯」は底本では「候」]、最初は微禄であられた所が、この壺を借りたその日から、トントン拍子に出世され

たそうだ。……で、この壺はそれ以来、甲府勤番御支配頭の、保管に嘱(しょく)していたものだそうな。そうして甲府城の土蔵の奥に大切に仕舞(しま)って置かれたんだそうな。……そいつを「爺(とっ)つぁん」が盗み出したのよ」

「へえ「爺つぁん」？　葉村(はむら)のかえ？」

「うん、そうさ、あの葉村のな。……今こそ玉乗(たまのり)の親方か何かで、真面目に暮らしているけれど、昔はどうして大悪党よ、俺ら以上の悪党だったのさ」

「だがおかしいね、その「爺つぁん」が、どうして手に入れた宝壺を、釜無の岸へなんか埋めたんだろう？」

「そいつア俺にも解らねえ」

「それに本当にその壺が、そんなに大した福の神なら、あの葉村の「爺つぁん」も、もっと出世していいはずだが、たいして出世もしねえようだね」

「うん、そう云やアその通りだが、そこには曰(いわく)があるんだろう。豚に真珠という格言もあらあ、せっかくの宝も持手が悪いと、ねっから役に立たねえものさ」

「今度は親方が手に入れたんだ、どうかマア旨く役立つといいが」

「役立つとも役立つとも。俺らきっと役立たせてみせる。伝説によるとこの壺は夜な夜な不思議をするそうだ」

「へえ、不思議をね？　どんな不思議だろうな」銅助は怪訝な顔をした。

「そいつも今の所わからねえ。この福の神を手に入れてから、まだ一晩も寝て見ねえんだからな」

「そうすると今夜が楽しみですね。小判の雨でも降るかもしれねえ」

宝壺！　宝壺！　ほんとに怪異など起きだすだろうか？

果然怪異は起こったのであった。

深夜、壺は音楽を奏した。

非常に微妙な音楽であった。

同時に人々は亢奮した。鼬が檻を食い破り、主人の喉笛へ喰らい付いた。

それは決して福の神ではなく、むしろ災難の神であった。

「釜無の文」は喰い殺された。

次にこの壺を手に入れたのは、文の手下の銅助であった。

「うん、俺は大丈夫だ。きっと福の神にして見せる」

で、それを枕元へ置き、安らかに眠ったことである。

すると、音楽が聞こえてきた。彼はにわかに胸苦しくなり、無宙で飛び起きて駈け廻った。

そうして柱へ頭を打ちつけ、血を吐いて死んでしまった。

損をしたのは木賃宿の亭主で、その月の宿賃をフイにした。そこで銅助の持物を一切バッタに売ることにした。

そこで、その壺と付属地図とはある古道具屋の手に渡った。

この間に世間は一変し、世は王政維新となり、そうして奠都(てんと)が行なわれた。

江戸が東京と改名され、大名はいずれも華族となり、

一世の豪傑勝安房守（かつあわのかみ）も、伯爵の栄爵を授けられた。

ところで義哉（よしや）はどうしたろう？

義哉は清元の太夫（たゆう）となった。

ところでお錦（きん）はどうしたろう？

お錦の身の上にも変化があった。まず許嫁（いいなづけ）の伊太郎（いたろう）が、肺を病んで病没した。そうして大家伊丹屋は、維新の変動で没落した。

そこで、お錦は自然の勢いで、小堀義哉の女房となった。二人にとってはこのことは、願ってもない幸いであった。勿論琴瑟（きんしつ）相和した。

義哉の芸名は延太夫（えんだゆう）と云った。

即ち清元延太夫（きよもとえんだゆう）である。もとが立派な旗本で、芸風に非常な気品があった。それが上流に愛されて、豊かな生活をすることが出来た。
貴顕富豪（きけんふごう）に持て囃（はや）され、引っ張り凧の有様であった。
勝海舟は風流人で、茶屋の女将や相撲取や諸芸人を贔屓（ひいき）にした。
そこで、延太夫の小堀義哉も、よく屋敷へ招かれた。

ある日延太夫（えんだゆう）は常時（いつも）のように、海舟の屋敷に招かれ

た。

「時に先生、不思議なことがあります」こう云うと延太夫は懐中から小さい壺を取り出した。「実は小石川の古道具屋で、手に入れたものでございますが、奇怪なことには深夜になると、音を発するのでございます。それが、しかも音楽なので。……」

「ほほう、そいつは不思議だな」こう云いながら海舟は、小さい壺を手に執(と)った。

「別に変った壺でもないが」

すると座に居た尚古堂(しょうこどう)が「拝見」と云って受け取った。

尚古堂は本姓を本居信久（もとおりのぶひさ）、当時一流の好事家で、海舟の屋敷へ出入りをしていた。

じっと壺に見入ったが、

「や、これは仙人壺だ！」驚いたように声を上げた。

「仙人壺だって？　妙な名だな。古事来歴を話してくれ」海舟はこう云って微笑した。

「宋朝古渡りの素焼壺で、吉凶共に著（いちじる）しいもの、容易ならぬ器でございます」尚古堂は気味悪そうに云った。夜な夜な音を発するのは、焼の加減でございまして、質の密度が夜気の変化で動揺するからでございます。これは不思議でございません。ちょうど茶釜が火

に掛けられると、松風の音を立てるのと、全く同じでございます。……が、この壺には世にも怪（あや）しい、一つの伝説がまつわって居ります。よろしければお話し致しましょう」

「聞きたいものだ、話してくれ」海舟も延太夫も膝を進めた。

「では、お話し致しましょう」

尚古堂は話し出した。

戦国時代の物語である。

甲州には武田家が威を揮（ふる）っていた。その頃金兵衛と

いう商人があった。いわゆる今日のブローカーであった。永禄四年の夏のことであったが、小諸の町へ出ようとして、四阿山の峠へ差しかかった。そうして計らずも道に迷った。と、木の陰に四五人の樵夫が、何か大声で喚いていた。近寄って見ると彼らの中に、一人の老人が雑っていた。襤褸を纏った乞食風ではあったが、風貌は高朗と気高かった。その老人がこんなことを云った。

「ここに小さな壺がある。が、普通の壺ではない。摩訶不思議の仙人壺だ。そうして俺は仙人だ、嘘だと思うなら見ているがいい。この壺の中へ飛び込んで見

せる」

それから老人は立ち上り、一丈（じょう）あまりも飛び上った。と、体が細まりくびれ、煙のように朦朧となり、やがてあたかも尾を引くように、壺の中に入って行った。

「見事々々！」と樵夫どもは、手を叩いて喝采したが、物慾の少ない彼らだったので、そのままそこを立ち去った。

よろこんだのは金兵衛で「こいつを香具師（やし）に売ってやろう。うん、一釜（ひとかま）起こせるかもしれねえ」壺を抱えて山を下った。

さてその晩旅籠（はたご）へ泊まると、早速怪奇が行なわれた。

壺が音楽を奏したのである。金兵衛はとうとう発狂した。旅籠の主人は仰天し、この壺を役人へ手渡した。それを聞いたのが勝頼（かつより）で「面白い壺だ、持って来るがいい」

で、その壺は勝頼の手で大事に保管されることになった。大豪（たいごう）の武田勝頼には、仙人壺も祟（たた）らなかったらしい。いやいや決してそうではなかった。壺は大いに祟ったのである。ある夜壺は音楽を奏した。これが勝頼にはこんなように聞こえた。

「天目山（てんもくざん）へ埋めろ！　天目山へ埋めろ！」

さすがの勝頼も気味悪くなり、侍臣（じしん）をして天目山へ

埋めさせた。

しかし祟りはそればかりではなかった。

天正十年三月における、武田と織田との合戦で、勝頼は散々に敗北した。で止むを得ず僅の部下と共に天目山へ立籠った。すると、にわかに鳴動が起こり、壺が地中から舞い上り、同時に天地は晦冥となった。

勝頼はその間に切腹し、全く武田家は亡びてしまった。

「と、こういう伝説でございますので。……その後手に入れた綱吉公が、将軍職になりましたし、柳沢侯が出世しましたので、幸福の象徴となりましたが、しか

し将軍綱吉侯は――大きな声では云えませんが、奥方の寝室（ねや）の中で暗殺され、つづいて柳沢侯は失脚しました。やはりこの壺はそういう意味から云うと、悪運の壺なのでございます」［＃「でございます」は底本では「でございます」」］

29

家へ帰って来た延太夫は、早速女房のお錦を呼んだ。そうして勝家（かつけ）での話しをした。
「恐ろしい壺でございますことね。で、その壺はどう

なさいました」
「伯爵様がお壊（こわ）しなされた。別に変事も起らなかった。ところで地図はどうしたえ？」
「壺に附いていた地図ですね。……ええここにございますわ」お錦は手文庫から取り出した。
「こんな物は焼いた方がいい」
延太夫は火をつけた。すると、火熱に暖められた地図の面（おもて）へ文字（もんじ）が浮かんだ。
そこで急いで火を吹き消した。
こう紙面には記されてあった。
「紫錦（しきん）よ、わしは「爺（とっ）つあん」だ。これはお前への遺

言だ。そうしてお前はわしの子だ。わしの本名は藤九郎だ。その頃わしは悪党だった。わしは宝壺を盗み出した。だが、ちっとも幸福ではなかった。その後釜無(かまなし)の中洲へ埋めた。そこで改めてお前へ云う、お前はわしの実の子だと。女房お半の産んだ子だと。その頃わしは諏訪にいた。伊丹屋の借家に住んでいた。その時伊丹屋でも女の子を産んだ。そこで俺は考えた。ひとつ子供を取り代えてやろうと。これは親の愛からだ。お前がわしの子である以上は、一生出世はしないだろう。しかし伊丹屋の子となったら、どんな栄華にでも耽ることが出来る。そこで、わしは取り代えた。勿論

伊丹屋では気が付かず、お染と名を付けて寵愛した。そうして本当の伊丹屋の子は、わしらの手で育てようとした。ところが二日目に死んでしまった。さて万事旨く行った。ところが神様の罰があたり、わしは迂闊（うっか）りその秘密を「釜無（かまなし）の文（ぶん）」めに話してしまった。文は宝壺をよこせと云った。だがわしは承知しなかった。そこで文めは仇をした。お前——即ち伊丹屋のお染を、鼬（いたち）を使って盗み出し、そうしてお前を女太夫に仕込み、そうしてわしから身を隠した。わしはどんなに探したろう。だが容易に目付（めっ）からなかった。長い年月が過ぎ去った。と、偶然お前に会った。するとどうだろうわ

しの子は、また伊丹屋の養女となって立派に暮らしているではないか。わしはすっかり満足した。もうわしは死んでもいい。どうぞ立派に暮らしておくれ。……さて例の宝壺だが、これは吉凶両面の壺だ。悪人が持てば祟りがあるが、だが善人が持つ時は、福徳円満を得るそうだ。可愛い可愛いわしの娘よ、どうぞ心を綺麗に持って、よい暮らしをしておくれ。そうして地図を手頼りにして、釜無川の中洲へ行き、宝壺を掘り出すがいい」

　読んでしまうと二人の者は、互に顔を見合わせた。意外な事実に驚いたのである。

「それでは気味の悪かったお爺さんは、妾（わたし）の実の親だったのかねえ？」
お錦の感慨は深かった。
「そのお父さんはどうしたろう？」
そのお父さんはとうの昔に、病気でこの世を去っていた。
そうして現在の二人にとっては、宝壺などは不必要であった。
なぜというに今の二人は、充分幸福だからである。

底本：「国枝史郎伝奇全集　巻二」未知谷
　　　１９９２（平成４）年11月20日初版発行
初出：「太陽」博文館
　　　１９２５（大正14）年7月～12月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：阿和泉拓
校正：湯地光弘
２００５年2月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。